

## 栄区セーフコミュニティ 第1回サーベイランス分科会

### 次第

日時：2018年1月15日（月）14時から

会場：栄区役所 1号会議室

#### 1 セーフコミュニティ事前指導の報告について

【資料1】事前指導の様子について

【資料2】セーフコミュニティ事前指導議事録要旨

【資料3】セーフコミュニティ事前指導議事録全体版

#### 2 サーベイランス分科会の今後の進め方について

【資料4】サーベイランス分科会の今後の進め方について

#### 3 再認証までのスケジュールについて

【資料5】再認証までのスケジュールについて

栄区傷害サーベイランス分科会委員名簿

田高 悦子 (座長)	横浜市立大学大学院 医学研究科・医学部地域看護学教室 教授
大原 一興	横浜国立大学大学院 都市イノベーション研究院 教授
小田原 俊成	横浜市立大学大学院 医学群 教授 横浜市立大学保健管理センター長
豊田 宗裕	聖徳大学 社会福祉学科 教授 横浜国際福祉専門学校 顧問
垣内 康宏	東海大学 医学部基盤診療学系法医学 専任講師
木村 博和	横浜市健康福祉局健康安全部 医務担当部長
山崎 大輔	栄消防署警防第一課 救急担当課長
近藤 秀政	栄警察署 交通課長
田中 豊	栄警察署 生活安全課長
平間 健一	栄警察署 交通総務係長
近藤 政代	栄区役所 福祉保健センター長

# セーフコミュニティ事前指導

2017.9.8～2017.9.10

事前指導の前にいたち川を散歩



1号会議室で記念撮影



元気づくりのリーダー養成講座を視察  
審査員の先生方も体操してくれました



翠風荘では英語でおもてなし



ふじやま公園で日本文化を堪能



スクールゾーンでは道路改修の説明も



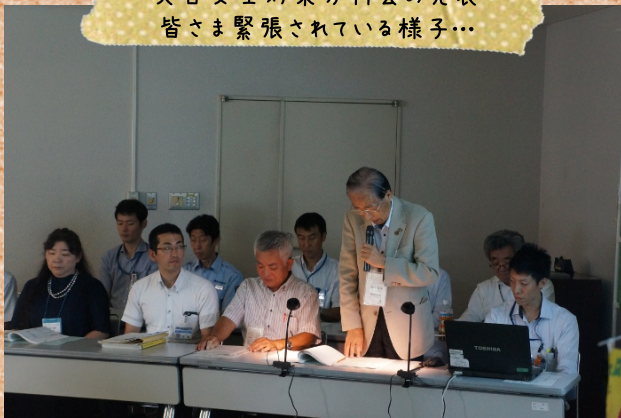
会場前ではたくさんのタッチーくんが  
分科会グッズを身にまといお迎え



他都市や韓国からのお客様で  
8・9号会議室が満席になりました



災害安全対策分科会の発表  
皆さま緊張されている様子…



交流会も実施しました！  
審査員の先生方と地域の皆さま



韓国の視察団の皆さまからは  
贈り物もいただきました



こども安全対策分科会の発表の様子



韓国からのお客様にも  
タッチーくんは大人気!!



審査員講評は  
1時間にわたって行われました



参加していただいた記念に  
タッチくんピンバッジをプレゼント



ハンソン先生はタッチくん大好き!



最後に参加者全員で集合写真



3日間ありがとうございました!



### ■ 主な審査員講評内容 ■

- ・ 前回認証時と比較して、取組が進んでいる。
- ・ データに基づいて問題点をしっかり示し、それに対する解決策をきちんとロジックを使って示すことができる。
- ・ 取組に素晴らしいポイントがたくさんあったので、誇りに思ってもらいたい。
- ・ 取組をわかりやすくするための工夫がもっとできる。
- ・ 論理的な説明はできているので、感情に訴えかけるプレゼンテーションを考えてみてはどうか。
- ・ 認証取得のための指標をどのように満たしているのかアピールしてほしい。

**皆さま、ご協力ありがとうございました！**

**引き続きセーフコミュニティの推進にご協力お願いいたします。**



## セーフコミュニティ再認証にかかる事前指導の審査員講評要旨

### ■全体（評価できる点や、審査員がチェックしている点等）

・（セーフコミュニティ活動を始めて）7年の間になし得たことに自信を持ってもらいたい。それに加えて、現時点で何が課題かということをしっかり分析しており、それに対してどのように進んでいくかという方向性を示していることが印象深く、感心している。なぜならば、問題解決の第一歩は問題を認識することだからであり、それについて歩みを進めていることは非常に重要である。

・栄区のすべての報告に共通することだが、セーフコミュニティを通しての気づきや学んだこと、何が変わったのかということを確認している。さらに、現在何が課題か、何を問題点として抱えているのかということを確認し示しており、それに対して今後どのように取り組んでいくかという、3つのポイントを最後にまとめて示していることは素晴らしい。問題を認識しているということは非常に大切なことなので、それに対して実際にどのような方向で取り組んでいくかをきちんと示している。素晴らしい取組をされているという自信を持って、これからも続けてほしい。

・申請書の中には、「何をやったか」は記載されているが、「なぜそれをやっているのか」という情報が含まれていないので、そこが一番知りたい。

・研究者は「何をしなければならないか」を考えるが、行政に従事する人や地域の人は、「どうやってやるか」を知る専門家である。そして、最後の1つの専門家が、コミュニティそのものである。地域の方々は、自分たちが住んでいる街の文化や、地域がどのようなものか、何が問題かということをよく知っている。よって、内容については地域の方が一番よく知っているということができる。地域の方々は、誰が、いつ対策を講じれば良いのか、よく知っている。先ほど私が説明した5W1Hのうち、研究者は「What」、行政は「How」、そしてコミュニティの方々は自分たちのことをよく知っているので、セーフコミュニティに取り組むにあたってはその三者が一緒になって取り組まなければ、5W1Hは実現しない。それによって、取組はより根拠に基づいたものになり、さらに実現可能なものになる。つまり、私たちは「研究者」「実務者」「コミュニティに住んでいる地域の方々」の3つの分野の専門家が必要であるということに心に留めておく必要がある。

・私たちが心配しているが起きていないこと、起きているのに心配していないこと、そのギャップが難しいポイントである。どちらの対策も行うことができれば、それが最も良い。ただ、「安心感」を高めるための取組は必ずしも「安全度」を高めることとイコールではないということは心に留めておく必要がある。

・栄区の場合、ロジックモデルを使っているが、その中で「ステップ1～3」という独自の言葉を使っているので、ロジックモデルの中でステップ1～3がどのように位置づけられているのかという全体像を示すことができると良いのではないかと。ロジックモデルでは、突然しっかりしたゴールが作られるので、それに向けて意識の変化、意識の変化による行動の変化、行動の変化によるけがの減少という3ステップで評価されていることを示せば、よりゴールと評価がつながると思う。「ハッドンマトリクス」というものがあるが、それは、ステップ1として「起こらないために

予防する」、ステップ2として「起こった時に深刻化しないために対処する」、ステップ3として「起こった後に再発を防ぐ、件数が増えないために対処する」というもの。「起こらないように」という考え方が最も重要だが、「起こった時」や「起こった後」にどうするかという違う段階での予防も併せて行っていくと、多層的に取組を広げることができる。横軸が時系列で、「起こる前」「起こった時」「起こった後」、縦軸が「人」「もの」「環境」という表になっている。それぞれの枠に何ができるかを書いていって示せば、非常に科学的にものごとを考えているということがわかるので、それで一度整理するというのも一つの方法である。

・指標4(④根拠に基づいた取組を実施する)は、セーフコミュニティを進める上で非常に大切なポイント申請書の作成やパワーポイントの修正の際には、大学の先生の調査の結果や他の自治体でけがが減っているという成果を補足情報として付けておいたほうが確実にプラスになる。KYT(危険予知トレーニング)を事例にとって説明すると、KYTとは何かという説明をもう1枚くらい増やしても良いかもしれない。まず、KYTとは何かを説明し、実際にこういうところで実施されている、という説明を入れられると、理解を深めてもらうことができると思う。またそれは、セーフコミュニティの指標4「根拠に基づいた取組」を示すことにもなる。

・(リスクを知っているのに対策をしないという) ギャップを埋める一番良い方法は、やらない人になぜやらないのか聞くことである。なぜなら、対策をやらない母親は、やらないことに関してエキスパートだからである。なぜやらないのかという理由は、彼女たちが知っている。教えて受け入れないということは、何回同じことを強く言ってもだめで、彼女たちが変わらない限りは変わらない。なぜ変えないのかということは、変えないことの専門家に聞くのが一番良い。教える前にまず聞くことにチャレンジしてほしい。

・何人にアプローチしたのかということも大切だが、それがどれだけのカバー率か、どれだけの家庭に必要な情報が届けられたか、手を差し伸べることができたかということが非常に大切。

・最初に設定したゴールをそのままにしているのではなく、常に振り返りを行い、その時々で何を改善しないといけないかを認識しながら、実情に合わせて取組を統合したり、増やしたり、変更したりという経緯を見せてもらったのが非常に良かった。取組を行っている中で、データの分析からどのように軌道修正して現在に至ったか、そして現在抱えている問題は何か、今後に向かってはどうしていくか、という風に、過去、現在、未来をつながった形で説明されていた。一貫してどの分科会もそういった素晴らしいストーリーを示していただいたので、そこはぜひこのまま続けてほしいと思う。本番の審査の時も、そこをしっかりと示すようにしてもらえれば良い。

・今のところドメスティックバイオレンスに関するデータはあまり表に出てきていなかったと思う。世界中でドメスティックバイオレンスは問題になっているので、問題がないというわけではなく、問題が表に出にくいということだと思う。他のデータのように、客観的なデータを入手しにくいとは思いますが、どういう状況か確認をして、それに対してどういう取組をしているということを本番で見せられると良いのではないかと。世界的に関心が高まっていることでもあるし、審査員はその部分を聞きたいと思うので、もう1度確認することをおすすめする。(白石先生コメント:指標3のハイリスク集団への取組の部分などで説明できるかも?) 現在こういう状況にあり、それに対して既にいろいろ取組をやっている、ということや件数が少ない、ということを示してもらえればそれで十分だと思う。



## ■プレゼンテーション方法について（テクニク的な部分）

---

・審査員は7つの指標についてチェックをしながら聞いているので、指標のどれに該当するのかわかるように工夫をすると、栄区が取組が7つの指標に沿っていることをすぐにわかってもらえる。 どういう風に7つの指標を満たしているか、活用しているかが大きなポイントになる。審査本番で取組を報告する際や、申請書を書く際には、そのポイントをアピールしてほしいと思う。

【参考】認証取得のための7つの指標

- ①分野の垣根を超えた協働を基盤とした推進組織を設置する
- ②両性・全年齢、あらゆる環境・状況をカバーする長期プログラムを継続的に実施する
- ③ハイリスクの集団・環境および弱者を対象としたプログラムを実施する
- ④根拠に基づいた取組を実施する
- ⑤外傷が発生する頻度とその原因を記録するプログラムを実施する
- ⑥プログラムの内容・実施行程・影響をアセスメントするための評価基準を設定する
- ⑦国内外のセーフコミュニティネットワークへ継続的に参加する

・大切なのは、「何をしてきたか」ではなく、「なぜ」「どういう風に」取組を進めているのかを見せてもらうことである。現地審査の際は、「Who(誰が)」「Whom(誰に)」「When(いつ)」「Where(どこで)」「What(何を)」「How(どういう風に)」の5W1H、6つのポイントを押さえているかどうかを頭に入れて、説明してほしい。

・（再掲）栄区の場合、ロジックモデルを使っているが、その中で「ステップ1～3」という独自の言葉を使っているので、ロジックモデルの中でステップ1～3がどのように位置づけられているのかという全体像を示すことができると良いのではないかと。ロジックモデルでは、突然しっかりしたゴールが作られるので、それに向けて意識の変化、意識の変化による行動の変化、行動の変化によるけがの減少という3ステップで評価されているということを示せば、よりゴールと評価がつながると思う。

・（再掲）申請書の作成やパワーポイントの修正の際には、大学の先生の調査の結果や他の自治体でけがが減っているという成果を補足情報として付けておいたほうが確実にプラスになるので、ぜひ付けてほしい。今回は出典を小さく書いているが、もっとしっかり示したほうが良い。申請書を記載する際にも、これは自分たちが勝手に良いと思っただけでやっているわけではなく、きちんと科学的根拠を確認した上で導入しているということをアピールすることは、指標4「根拠に基づいた取組」であることを示す重要なポイントである。教授の顔写真でも入れたらもっと良いのではないかと。

・気を付けなければならないのは、ここで言うKYTのような略語である。KYTは危険予知トレーニングの略で、日本人にしてみれば納得できるが、英語圏の人が聞いても何のことかわからない。他の分科会にもすべて言えることだが、申請書を書く際やパワーポイントの資料を作る際などはそういったところに注意して、欄外で説明するなどの工夫が必要。

・「何を示したいのか、ストーリーは何なのか」ということ、そして「何を使って示しているのか」ということ、これは例えば今はパワーポイントを使っているが、他の方法も検討する中で何が一番効果的なのかを考える必要があるということである。そして、「誰がそれを伝えようとしているのか」、「誰に伝えようとしているのか」ということである。ストーリーをいかに伝えるかということが重要

・「何を一番覚えておいてもらいたいのか」「何を一番伝えたいのか」ということをイメージしながら伝えることである。どうやったら効果的に注意を引き付けられるのかを考えるのも一つの方法。（例えば、ヒートショック対策にあたり日本のお風呂場の特徴を説明する写真が貼付されたスライドで）青い光を使うととても寒そうに見えるなど、視覚的な効果を使うことも一つの方法である。また、浴槽からは湯気が立っているようなイメージにすると熱そうに見え、寒い脱衣場から熱い湯船に飛び込むことが想像しやすい。

・日本の他の自治体では、報告の後に関係する方たちが体験談や感想を話すところが増えている。皆さんがどうやったら伝えやすいか考えて工夫してみてくださいと思う。

・本番に向けて、右の脳も使うよう審査員にアプローチしてはどうか。右の脳を使うためにどうすれば良いかと言うと、感情や心にアプローチすることが必要。先ほども申し上げたとおり、何を伝えたいかということによって、うまくそこを使い分けてもらう工夫をこれからしてもらえると良い。伝えたいメッセージによっては、統計の方が伝わりやすいかもしれないが、補足的に人々やコミュニティに関するストーリーの事例を提供することで、両方の脳を使って皆さんの取組を理解することができ、より効果的に伝わると思う。

■各分科会に対するコメント（具体的に指摘があった部分）

-----  
《傷害サーベイランス分科会》

・病院で収集するデータは私たちが必ずしも欲しいと思っているデータではない場合がある。例えば、病院で記録されているデータは、けがの症状や種類が中心になるかと思うが、セーフコミュニティで必要とされているデータはけがの原因や、どのような状況であったか、どのようなメカニズムであったか、どこでけがをしたかという、予防に資する情報である。よって、必ずしも病院のデータが入手できたからと言って、すべての情報が入手できるわけではないということは私たちも経験している。病院のデータだけではなく、今収集しているデータと補完し合いながら、より「使える」データにすることが大切だと思う。

《防犯対策分科会》

・振り込め詐欺と併せて今後は自転車盗などの乗り物盗についても対策することだったが、そのどちらも、「Safety」ではなく「Security」の分野の取組になるかと思う。せっかくセーフコミュニティという枠組みの中で取組を行うのであれば、「Safety」＝心身の安全にかかわる問題にもぜひ着目してほしい。振り込め詐欺をきっかけとして次にどのような被害が発生するか見ていくことも、セーフコミュニティの取組として大切なポイントだと思う。そういう意味で言えば、「Security」だけでなくその周囲の「Safety」の部分にも目を向けることは、直結する問題の解決だけでなく、さらに根の深い問題にもアプローチできることになる。指標4にも関係するアドバイスだが、どのように根拠に基づいた取組が行われているのかを「心身の被害」という視点からもう一度見てみたら、新しい点が見えてくるかもしれない。一度それを考慮しながら皆さんで議論してみることで、さらなる改善につながる可能性がある。

・スライド4：神奈川県や横浜市と刑法犯認知件数の実数を比較しているが、比較した際に多いのか少ないのかが分かりづらい。「人口1万人あたり」といった表記等をすれば、栄区が多いのか少ないのかわかりやすくなると思う。

・今日説明してもらったように、振り込め詐欺で自殺まで至る方や、アルコール中毒になるほど自分を追いつめてしまう方、家族と断絶してしまう方や孤立してしまう方もいるという基本のポイントをしっかり押さえて説明をすることも重要。そういったことをきちんと説明した上で、栄区としてどうして取組を行っているのか、何が一番効果的なのかを、全体像を示して説明すると良いのではないかな。

《スポーツ安全対策分科会》

・（「構成団体を中心とした区民の自発的な活動の中で、アンケートに基づいて取組を実施してきた。学校については、学校教育という枠組みの中で教師がついて実施しているものなので、これまで取組の対象としておらず、データも存在しない。」という説明に対して）データの中に学校でのけがについては含まれていないということが説明しきれていない。

・歩く歩数と骨密度の関係など、世界中に様々な事例があると思われる。そういった情報を根拠にすれば、これから取り組むことになる人にも参考になると思う。一度事例や研究成果を探して、ツールとして使ってほしい。また、

来年申請書を作成する際にもそういったデータを示してもらえると、自分たちにとっても良い情報になると思う。例えば、1日1万歩歩けば良いとよく言われるが、おそらくそれにも根拠があると思う。実際に歩いている人と歩いていない人の差などのデータを見て、国などが言っているのではないか。そういう事例があれば示してもらえることで、何となくやっているわけではないという証拠になる。おそらくいろいろな見せ方があり、1万歩というのも一つの見せ方だが、30～40分の運動を週5回すれば1万歩に匹敵する運動になるという研究の成果を見たこともある。いずれにせよ、根拠に基づいた取組であるということを示せると、面倒だと思っている人もやる気になるかもしれない。

・こういう道を歩けば安全、などという情報提供も役に立つのではないか。

### 《災害安全対策分科会》

・災害への備えは重要だと感じているにもかかわらず、感震ブレーカーを導入していなかったり、防災訓練にも半分程度しか参加していなかったりと、大切さを知っ~~て~~ながら実際に行動を起こせていない人とのギャップがある。既に知っていることを重ねて言って押し付けても限界があるので、「なぜしないのか」と聞いてみるということは一つの手段である。

### 《こども安全対策分科会》

・既に栄区では養育者にアプローチして情報提供し、それが実践に移されているか確認しているということで、それは非常に重要なこと。情報を与えているから親がそれを実践するだろうという考えは甘く、行動と知識はリンクしているわけではないので、そこに着目し、これからも工夫していくと良いのではないか。

・気を付けなければならないのは、ここで言うKYTのような略語である。KYTは危険予知トレーニングの略で、日本人にしてみれば納得できるが、英語圏の人が聞いても何のことかわからない。他の分科会にもすべて言えることだが、申請書を書く際やパワーポイントの資料を作る際などはそういったところに注意して、欄外で説明するなどの工夫が必要。

・インターネットのいじめについては未知数なので、日本でもこれから起こり得る課題として見きわめながら取組をしてほしいと思う。

### 《児童虐待予防対策分科会》

・スライド4番について、ここで言いたいのは、子どもの世話をした経験がないから子どもを初めて持った時にどういう風に対応したら良いかわからず孤立してしまい、そのために児童虐待に走りやすいということだと思うが、論理的にそれを説明することはできるのか。また、スライド7番～9番について、いろいろとデータを示しているが、事実を示して「〇〇が必要」となっている部分に関して、「なぜ？」と思うところが多い。例えば、スライド7番については、横浜市と栄区の違いを虐待の種別で比較しているが、だから子育てサポートが必要なのはなぜなのか。なぜ心理的虐待が多く、それがなぜ子育てサポートにつながるのかという説明が聞いていて掴み取れなかった。スライド8番については、横浜市と栄区の虐待者別の割合を示しているが、どちらも加害者として実母が多いのはなぜなのか。オーストラリアでは虐待者は実父が多い。また、スライド12番について、どうしてここに書かれていることが

分かるのか。なぜ地域全体で子育てを見守る地域づくりが必要なのか。なぜ地域のつながりの希薄化によって育児が孤立化しているのかなど、4つの項目がどうやってわかったのか。初めて聞く者には、やっていることとその理由、背景がつかない。おそらく日本人としては社会情勢や国民性が何となくわかっているため、自分たちで行間をつなげているのだろうが、海外の者には行間をつなげるだけの情報がないので、なぜこういう風に言えるのか、唐突に見える。12 番目、13 番目のスライドは、なぜこの取組をしているのかということを理解してもらうために、非常に大切なポイントになると思う。審査員としては報告の内容を理解したいと思うので、より理解を深めるために今伝えたような情報を追加してもらえれば、やっている取組の理由を知ることができ、納得できる。

#### 《高齢者安全対策分科会》

・「ヒートショック」というのはピンとこない。もしかしたら和製英語かもしれない。説明を聞けば何のことだかは分かるが、英語として聞くと不自然に感じるので、どういふものを説明してもらえて良かった。

#### 《交通安全対策分科会》

・スライド 24：根拠に基づいた取組だと説明するためには、なぜスピードが減少したことが成果だと言えるのかをまず示さなければならない。そのために、こういったものを見せて、スピードが約 10km/h 減るとこれだけ衝撃が減るというのを見せられると、より分かりやすくなるのではないか。本番に向けては、「なぜスピードを落とす意味があるのか」というところをしっかりと示すことと、車の減速によってどれだけ事故が起きた際の致死率が変わるかなどを併せて示すことができれば、取組をする理由として説得力が増すと思う。



## 平成 29 年度 栄区セーフコミュニティ事前指導 審査員コメントまとめ

日時	平成 29 年 9 月 9 日（土）～平成 29 年 9 月 10 日（日）
場所	栄区役所 新館 4 階 8・9 号会議室（9 月 9 日～10 日）
出席者	<p>■審査員</p> <p>デイル・ハンソン（Dale Hanson） チョ・ジュンピル（趙 竣秘）</p> <p>■アドバイザー</p> <p>白石 陽子（日本セーフコミュニティ推進機構代表理事） 今井 久人（日本セーフコミュニティ推進機構事務局長）</p> <p>■各分科会委員（別紙参照）</p> <p>■栄区役所</p> <p>小山内 いづ美（栄区長） 見上 正一（栄区副区長） 近藤 政代（栄区福祉保健センター長） 前田 博之（栄区福祉保健センター担当部長） 鈴木 誠（栄区土木事務所長）</p> <p>■事務局</p> <p>雨堤 崇（栄区区政推進課長） 高橋 千春（栄区区政推進課企画調整係長） 石田 梓（栄区区政推進課企画調整係）</p> <p>■各分科会事務局（別紙参照）</p>

## 1 栄区概要

### ○チヨ先生

2013年に初めて認証を取得してから今日まで、どのように取組を進めてきたのかよくわかった。どのような成果が得られたのか紹介してもらえて嬉しく思う。現時点で上げられている成果、また次に向けて設定している課題がわかったので、これから続く分科会の報告の中で、より具体的な内容が聞けることを楽しみにしている。私は前回の審査員もしていたので、前回からの4年間でどのくらいの変化があるのか、非常に期待している。

### ○ハンソン先生

昨日からとてもあたたかく迎えてもらったことを嬉しく思う。また、副区長に栄区の実情の全体像を説明してもらったが、自分たちの言葉でしっかり話をしてもらい、パワーポイントを英語で用意してもらったことを嬉しく思う。この場で一番大切なことは、栄区のことを知らない自分にどのように栄区のことを理解させるかということだが、自国語でない英語を考慮しながら準備するのは簡単ではない。その配慮について嬉しく思っている。

皆さんが最初にセーフコミュニティに取り組んで7年が経過しているが、その7年の間になし得たことに自信を持ってもらいたい。それに加えて、現時点で何が課題かということをしっかり分析しており、それに対してどのように進んでいくかという方向性を示していることが印象深く、感心している。なぜならば、問題解決の第一歩は問題を認識することだからであり、それについて歩を進めていることは非常に重要である。

(聴衆席に向かって) ここにいる方の中で、2～3歳の子どもや孫がいる人はいますか？その方たちにお聞きします、子どもが一番好きな質問は何ですか？子どもが親や祖父・祖母に対して一番よくする質問は何ですか？オーストラリアでは、2～3歳の子どもは親や祖父・祖母に対して「なぜ？」という質問をよくするとされている。例えば、私が孫に人形を与え、一緒に遊ぼうと言うと、「なぜ人形を私にくれるの？」と質問する。私はそれに対して、「あなたは女の子で、女の子は人形が好きだからだよ」と答える。しかし孫は「私はトラックのおもちゃで遊びたい」と言うこともある。皆さんはそういう経験はないか？子どもたちがそのように聞くのは、なぜ大人がそのようなことをしているのか、大人の世界を知るために質問をしている。その状況を私たちに当てはめてもらいたい。私のことは、栄区のことを何も知らない小さい女の子で、皆さんは栄区のことをよく知っている大人だと思ってほしい。そして、私が栄区のことを次々に質問するのを許してほしい。

もし来年の本審査で私が審査員になった場合、送ってもらった申請書を少なくとも2～3日かけてじっくり読んで、それに対してメモを取る。そのため、私がこちらに到着した時点では、栄区が何をしてきたかということ十分に理解し、頭の中に入った状態である。そのような場合は、申請書に書いてあることを一から十まで話す必要はない。申請書の中には、「何をやったか」は記載されているが、「なぜそれをやっているのか」という情報が含まれていないので、そこが一番知りたい。よって、私がもし審査員としてここに来た場合は、「なぜ？」と聞き続けると思う。

私がオーストラリアで実施している解決策は、日本ではうまくいかないかもしれない。オーストラリアでの成功例が、必ずしも日本で成功するとは限らないということは分かっている。違うから間違っているわけではなく、違う国、違うコミュニティであれば違う解決策があつて当然で、それも同様に素晴らしい解決策である場合が多数ある。私はそういう部分が知りたい。

大切なのは、「何をしてきたか」ではなく、「なぜ」「どういう風に」取組を進めているのかを見せてもらうことである。現地審査の際は、「Who (誰が)」「Whom (誰に)」「When (いつ)」「Where (どこで)」「What (何を)」「How (どういう風に)」の5W1H、6つのポイントを押さえているかどうかを頭に入れて、説明してほしい。申請書で表現しづらかった部分について、そうやって現地審査でしっかり示してもらうことで、私は「なぜ皆さんが取組を行っているのか」を理解することができ、より正しく審査ができると思う。子どもように「なぜ？」を繰り返し、子どもの視点で審査することになることをお許しいただければと思う。



## 2 傷害サーベイランス分科会

### ○チョ先生

最初の認証の際の報告と今回の報告を比較して、数年間の大きな進歩を感じた。実際に、いろいろな自治体、コミュニティでセーフコミュニティに取り組んでいるが、いまだかつて 100%完璧なサーベイランスの仕組みを実践しているところはない。その中で、栄区ではこのようにだんだんと良いものへと変化していることを見せてもらえて嬉しく思う。特に、自分の経験から言うと、政令都市のような大きな自治体では、大きな自治体ならではのデータ収集・分析の難しさがある。今後の課題について、医療機関のデータも含めて検討するという風に言っていたが、私どもの経験からいくと簡単ではない。病院で収集するデータは私たちが必ずしも欲しいと思っているデータではない場合がある。例えば、病院で記録されているデータは、けがの症状や種類が中心になるかと思うが、セーフコミュニティで必要とされているデータはけがの原因や、どのような状況であったか、どのようなメカニズムであったか、どこでけがをしたかという、予防に資する情報である。よって、必ずしも病院のデータが入手できたからと言って、すべての情報が入手できるわけではないということは私どもも経験している。病院のデータだけではなく、今収集しているデータと補完し合いながら、より「使える」データにすることが大切だと思う。

スライドの 13 番について、1 つだけ質問したい。何が功を奏してセーフコミュニティの認知度が上がったのか教えてほしい。

(事務局回答)

栄区ではいろいろなプロモーションを行っているが、セーフコミュニティという言葉を知らない層に向けては啓発グッズの配布やポスターの掲示をしてきた。また、セーフコミュニティという言葉を知っている方に向けては、広報等で具体的な取組について啓発を行ってきた。そうした認知の度合いに合わせたプロモーションを展開することで、認知度の向上につながったと考えている。

(田高座長回答)

栄区のサーベイランスシステムの強みの一つとして、コミュニティが入っているということが挙げられる。そのコミュニティが 8 つの分科会を構成していることで、よりセーフコミュニティの認知度を高める働きができています。また、栄区は自治会・町内会の加入率が高い区の一つである。したがって、そのような組織的な活動を通して 8 つの分科会からのメンバーからの意思疎通やコミュニケーションが働いているとも考えられる。

(チョ先生返答)

コミュニティを通して取組を広げていくのは大切なステップだと思う。大きなポイントとなるのは、いかにコミュニティのエンパワーメントを行っていくかということ。コミュニティに権限を与えて、自分たちが問題解決の主体者として活動してもらえるかというのがポイントになる。

(小山内区長回答)

昨年、区制 30 周年の記念事業が区内で賑やかに行われた。大勢が参加する多くの催しの中で、自分や連合町内会長がセーフコミュニティについて語るが多かったため、福祉的な団体や学校をはじめ、あらゆる立場の方々に訴える機会が例年より多かった。そういったことも昨年度の調査結果に多少影響しているのではないかと感じる。

(ハンソン先生コメント)

区長の言うとおりの、いかにコミュニティの人たちが主体者として問題解決に携わっているかを認識することは非常に大切だと思う。

## ○ハンソン先生

セーフティプロモーションというのは、コミュニティが取り組むには難しいチャレンジである。その中で、栄区がこのようにサーベイランスの仕組みを導入し、サーベイランスから得られたものを実践に活かしていく仕組みについて学んでいることを嬉しく思う。

実社会において、セーフティプロモーションの向上については、いろいろな意味での専門家が関わっており、それぞれの分野の中で様々な試みをしている。そういったいろいろな分野の人たちがつながりながら進めていかなければならないということを図式したものがある。(iPadで図を表示) 専門家の1つが我々のような研究者(学術専門家)である。研究者の専門性は、データを収集して科学的な根拠に基づいて何ができるかを示すことである。一方で、実際に地域で活動している方も専門家である。ただ、地域の方々が専門家の話を聞いても、雲をつかむような話でよくわからないということがある。よくある事例として、研究者が科学的な知見に基づいて興味を示したことでも、実社会においては有効性があるのかわからない、実践不可能なものもある。研究者は「何をしなければならないか」を考えるが、行政に従事する人や地域の人は、「どうやってやるか」を知る専門家である。そして、最後の1つの専門家が、コミュニティそのものである。地域の方々は、自分たちが住んでいる街の文化や、地域がどのようなものか、何が問題かということをよく知っている。よって、内容については地域の方が一番よく知っているということができる。地域の方々は、誰が、いつ対策を講じれば良いのか、よく知っている。先ほど私が説明した5W1Hのうち、研究者は「What」、行政は「How」、そしてコミュニティの方々は自分たちのことをよく知っているので、セーフコミュニティに取り組むにあたってはその三者が一緒になって取り組まなければ、5W1Hは実現しない。それによって、取組はより根拠に基づいたものになり、さらに実現可能なものになる。つまり、私たちは「研究者」「実務者」「コミュニティに住んでいる地域の方々」の3つの分野の専門家が必要であるということを中心に留めておく必要がある。よって、今の報告の中にあったように、サーベイランス分科会の中に、研究者だけではなく、実務を担う方々を加えているということを知って非常に嬉しく思う。三者が一緒になって取り組まなければ、本当の課題の解決にはたどり着くことはできない。そういう意味では、栄区のサーベイランス分科会の変遷を見ていくと、そのようなことを学んでいると理解できるので、素晴らしい試みだと思う。

学術的分野の方々は「何が必要か」をよく理解している。先ほどの質問に対しても、「どのようにしてきたか」を具体的に回答したのは行政の担当者や区長だった。私の述べた話の事例がちょうどここで紹介されたように思う。かかわるすべての人々が、何が問題かを共有する必要がある。

スライドの10番について、表の中の「その他」というのは何か。

(事務局回答)

人口動態統計から分析しているデータだが、「その他」については細かい部分について把握できていない。調べて分かり次第報告する。

(田高座長回答)

これは日本の死因分類の限界だと思う。

(ハンソン先生返答)

その通りだと思う。その中で詳細が分かれば新たな側面も見えるかと思い、質問した。

続いて、スライド15番について、ここでセーフコミュニティにおける重要なポイントを示していると思う。「安全向上」と「外傷予防」の違いがここに現れているのではないかと。実際にデータを見て見ると、リスクとして皆さんが認識しており、感心があるのは「交通安全」と「防犯」である。しかし、実際の死因や救急搬送のデータを見ると、「交通安全」と「自殺」が重要な問題として見られる。地域の方々は、「防犯」について心配している一方、「自殺」についてはあまり気にしていない。ここが問題であり、これは世界中共通の問題である。皆さんが森の中にでも住んでいれば、犯罪への恐怖はなくなるかもしれない。それも一つの解決策ということもできる。オーストラリアでは、道を歩いていて暴行を受けることが課題となっているが、それによ

て高齢者の方々が怖くて家に引きこもりがちになるなど、他の問題も起こしている。そうすると本末転倒で、本当は外に出て体を使い、健康な体を維持することでけがをしないようにする必要がある。つまり、実際に犯罪が起こっているかどうかは問題なのではなく、犯罪が怖いと思うことで高齢者が家から出なくなり、それによって運動不足を引き起こすなど、新たな課題を生むことが問題で、単に犯罪発生率が低いからと言ってそれが問題ではないとは言えない。そういう意味では、意識というものが非常に大切である。実際、オーストラリアでも、外に出たからと言って頻繁に暴行を受けるわけではない。それよりも、マットで滑って転んだり、お風呂の中で眠って溺れそうになるなど、高齢者の方々がそれほど気にしていない、安全だと思っている家の中の事故の危険性の方が高かったりする。何が正しくて何が間違っているということではなく、いろいろな側面から見えていく必要があるということ。セーフコミュニティというものは奥が深く、データを見てすぐに解決したり、何が課題かすぐにわかったりするわけではないということが難しい。私たちが心配しているが起きていないこと、起きているのに心配していないこと、そのギャップが難しいポイントである。どちらの対策も行うことができれば、それが最も良い。ただ、「安心感」を高めるための取組は必ずしも「安全度」を高めることとイコールではないということは心に留めておく必要がある。一番理想的なのは「安心感」も高くなり、「安全度」も高くなることである。簡単なことではないが、チャレンジする価値は十分ある。両方にアプローチしていただき、うまくいった暁には私どもにどうやったらうまくいくかぜひ教えてほしい。

### 3 防犯対策分科会

#### ○チョ先生

韓国でも振り込め詐欺は重要な課題として取組を行っている。防犯対策分科会では、振り込め詐欺と併せて今後は自転車盗などの乗り物盗についても対策することだったが、そのどちらも、「Safety」ではなく「Security」の分野の取組になるかと思う。だからと言って、振り込め詐欺や自転車盗への対策が必要でないと言っているわけではなく、大切な問題だと理解している。ただ、せっかくセーフコミュニティという枠組みの中で取組を行うのであれば、「Safety」＝心身の安全にかかわる問題にもぜひ着目してほしい。例えば、心身の安全にかかわる問題で言えば、ドメスティックバイオレンスや虐待等が挙げられる。栄区では虐待予防対策のための分科会も設置されているので、その分科会とお互いに補完し合いながら、より広い取組を行ってもらえればと思う。

スライド4で、神奈川県や横浜市と刑法犯認知件数の実数を比較しているが、比較した際に多いのか少ないのかが分かりづらい。「人口1万人あたり」といった表記等をすれば、栄区が多いのか少ないのかわかりやすくなると思うので、実数を取り扱う際はそういった視点も取り入れることができれば、本審査の際にはより理解してもらいやすくなるのではないかと。

#### ○ハンソン先生

サーベイランス分科会の発表の際にもコメントしたが、実際に起こっている事実と、住んでいる人の不安とは一致するとは限らないというのが大切なポイント。実際に犯罪は起こっていないにもかかわらず不安に思っている方が多いというのはそういうことだと思う。ただ、最も危険なのは、どちらのリスクも認識していないということである。振り込め詐欺の場合は、高齢者がリスクを認識できていないことが大きな問題。社会では、外に出ることがリスクだと認識されているが、ここでは家族の中のバランスが重要である。振り込め詐欺をきっかけに家族の輪が乱れ、崩れることで、ドメスティックバイオレンスが発生するなど、家族の安全を乱すことにつながる。また、児童虐待が起きた場合はその後の世代の虐待にもつながるなど、負の連鎖を起こしてしまう可能性もある。オーストラリアでは、女性の4人に1人が家族や近い存在からの性的あるいは肉体的な虐待を受けているという統計結果があるが、そのような状況は近年、世界的にも認められるようになってきている。そういった事態が起きると被害者の女性だけではなく、子どもや次の世代に波及し、複雑かつ広範に渡る問題になっていく。振り込め詐欺の直接の被害だけではなく、振り込め詐欺をきっかけとして次にどのような被害が発生するのか見ていくことも、セーフコミュニティの取組として大切なポイントだと思う。そういう意味で言えば、チョ先生の言っているように、「Security」だけでなくその周囲の「Safety」の部分にも目を向けることは、直結する問題の解決だけでなく、さらに根の深い問題にもアプローチできることになる。一方で、振り込め詐欺は肉体的・精神的な「Safety」ではなく、経済問題やその他のさまざまな問題に直結していることについても着目する必要はある。

このように、審査員は必ずしも同じ意見を持っているわけではないので、意見を聞いてコミュニティがどう判断するのか決めてほしい。また、審査員が自分たちになるとは限らないので、どのようなバックグラウンドを持ち、どのような意見を持っている方にも納得してもらえるような説明をしなければならない。もちろん、今日説明してもらったように、振り込め詐欺で自殺まで至る方や、アルコール中毒になるほど自分を追いつめてしまう方、家族と断絶してしまう方や孤立してしまう方もいるという基本のポイントをしっかり押さえて説明をすることも重要。そういったことをきちんと説明した上で、栄区としてどうして取組を行っているのか、何が一番効果的なのかを、全体像を示して説明すると良いのではないかと。正しい答えは1つではないので、審査員が「間違っている」というコメントをすることはない。審査員もそれぞれのバックグラウンドや経験を持ち、国が異なれば文化も異なるので、コメントすることの意義はあると思う。ただ、それらのうちどれが最も役に立ち、どれが最も実践可能なのかということは自分たち審査員には計り知れない部分もある。よって、私たち審査員は、「これであれば皆さんの役に立つ」「助けになる」と思うコメントをしているということを理解

してほしい。私なりの考えも答えもあるが、私は栄区の人間ではないので、栄区の問題や栄区の安全について「これをやりなさい」ということはしない。皆さんが自ら答えを見つけて実践していくことが「地域力」であり、私たちは「地域力」を伸ばすためにどのようなアドバイスをすれば良いかと考えている。審査員と意見が異なるからおかしいということではなく、違いを聞きながら栄区の方針について答えを出していてももらえれば嬉しい。ただ、審査員が何を言ってもわが道を行けば良いということを言っているわけでもない。皆さんの気づいていない側面について、外部の人間だからこそ気づき、「ここは大丈夫？」と確認した部分について、一度検証してもらうことも意義があると思う。たとえば、先ほどチョ先生が言及したDVについては、振り込め詐欺がDVにつながっていないとも限らないが、皆さんはそこまでまだ考えていないかもしれない。審査員はそういった新しい気づきを示すことができるので、そのようなところを参考にしてほしい。DVについては、つながりが見えず隠れているだけで実は問題として存在するかもしれないので、一度確認してほしい。

指標4にも関係するアドバイスだが、どのように根拠に基づいた取組が行われているのかを「心身の被害」という視点からもう一度見てみたら、新しい点が見えてくるかもしれない。一度それを考慮しながら皆さんで議論してみることで、さらなる改善につながる可能性がある。栄区の強みとして、傷害サーベイランス分科会が非常に有機的に機能しているという報告があったので、サーベイランス分科会と一緒にそういう点を強化するのも良いのではないかと感じる。振り込め詐欺は、お金を失うという要素は一時的かもしれないが、そこから根深い問題に広がっていく可能性も高いので、皆さんが言うとおりの重要な問題として取り組む意義は十分あると感じる。根拠に基づいた取組を行うことは非常に難しいように感じるかもしれないが、きちんと効果があるという根拠があれば、他のコミュニティも参考にしやすい。指標4は後から加えられたものであり、WHOはこの部分を頑張してほしいという思いがある。よって、本番に向けては、「外傷予防と心身の被害をどのように予防するか」という視点と、「安全の向上」という視点からしっかりと見せることができれば、十分に成果を示せると思う。

スライドの14番について、これから本番に向けて申請書を作成する際のアドバイスをしたい。取組の中では時に、いいことをしているにもかかわらず、なぜそれをやっているのか認識できていないこともある。このスライドには、外傷予防という点から非常に重要な「ハドンマトリクス」が使われているのではないかと感じる。「ハドンマトリクス」とは、ステップ1として「起こらないために予防する」、ステップ2として「起こった時に深刻化しないために対処する」、ステップ3として「起こった後に再発を防ぐ、件数が増えないために対処する」というものだが、ここでの流れはそれに近いのでは。例えば、ハドンマトリクスでは、交通事故等を対象にすることが多いのだが、ステップ3「起こった後にどうするか」ということについて、救急搬送して少しでも被害を最小限にとどめたり、早急に手当てをしたりといった事例が挙げられる。

(白石先生補足)

ステップ1、2、3と書かれているので、ハンソン先生がハドンマトリクスのフェーズと勘違いされている部分があるのかもしれない。

(ハンソン先生続き)

「起こらないように」という考え方が最も重要だが、「起こった時」や「起こった後」にどうするかという違う段階での予防も併せて行っていくと、多層的に取組を広げることができる。被害に遭った方は被害に遭ったからもう遅いと考えのではなく、その方にはもう起こらないように、あるいは家族の中で孤立しないように、または自殺しないように、起こった後に次のステップに行くことを予防するためにどうするかと多層的に考えることも一つの方法である。ハドンマトリクスは世界的に外傷予防の際「何を予防するのか」を考えるのにとっても参考になるマトリクス。横軸が時系列で、「起こる前」「起こった時」「起こった後」、縦軸が「人」「もの」「環境」という表になっている。それぞれの枠に何が書けるかを書いていって示せば、非常に科学的にものごとを考えているということがわかるので、それで一度整理するというのも一つの方法である。

(白石先生補足)

ハッドンマトリクスについて他の自治体で使ってみたが、結構時間がかかる。もし使うことになれば JISC も手伝うことは可能。一度整理をすると、誰が何をするか非常にわかりやすくすることができるので、もし関心があれば言ってもらえれば、支援センターとして手伝いたい。

(ハンソン先生続き)

おそらく白石さんも喜んで手伝うと言っている気がするので、一度整理してみると、審査員の理解もより進むのではないかと思う。また、防犯だけでなく他の取組にも共通するので、使ってみてほしい。皆さんは知らないかもしれないが科学的に進んだ分析をしているので、引き続き取組を進められることを期待している。

## 4 スポーツ安全対策分科会

### ○チョ先生

準備運動の取組について、その対象者は学校の生徒なのか、それとも社会人になってからスポーツしている人を対象にしているのか、それともその両方なのか。

(事務局回答)

学校でのスポーツについては、学校教育の中で教員がついて実施しているので、取組の対象とはしていない。スポーツをする一般の方、あるいは体育協会に所属し、サッカークラブや少年野球に参加している子どもを対象にしている。

(チョ先生返答)

スライド4番のデータについて、事故・けがの発生状況を年代別に分析しているが、10代以下の子どもが約半数を占めている。学校は取組の対象としないということだが、教員や部活動のコーチなども対象にする必要があるのではないか。

それに関連して、10代の子どもたちは、体育の時間や運動会など、学校教育の中でどれくらい運動をしているのか。また、それ以外のクラブ活動や個人が所属しているクラブでの活動などでの運動はどのくらいを占めているのか。運動量の状況を知りたい。

(事務局回答)

これまで分科会では、構成団体を中心とした区民の自発的な活動の中で、アンケートに基づいて取組を実施してきた。学校については、学校教育という枠組みの中で教師がついて実施しているものなので、これまで取組の対象としておらず、データも存在しない。

(白石先生補足)

データの中に学校でのけがについては含まれていないということが説明しきれていない。

(事務局回答)

このスライドでグラフになっているデータは、分科会に参加している各種団体へのアンケートの回答に基づいているものなので、学校でのけがは含まれていない。

(ハンソン先生コメント)

多くの人たちは、学校に籍を置いている時は体育の時間があったり、クラブ活動があったりして、積極的に運動をすると思う。その時は、説明にあったとおり、学校という環境下での安全はある程度確保されていると思うが、卒業してしまうと個人の意思に任されてしまう部分が大きく、そうなるとう運動をやめてしまう人も出てくる。学校に在籍していた時のノウハウなどを引き続き持ち続け、社会に出てからも運動に関心を持ってもらえるように考えることは大切なのではないか。

(白石先生補足)

それはどのように行うのか？

(ハンソン先生返答)

安全に楽しく運動をするという姿勢を身に着けたまま社会に出てもらうことで、よりスポーツ人口が増えるのではないか。

(チョ先生コメント)

スライド20番について確認だが、歩数計の配布数は毎年のもものなのか、それとも累積なのか。

(白石先生補足)

累計だと聞いている。

(チョ先生返答)

歩数計を配布する前と比較してどれくらいウォーキングをする人が増えているのかという情報があつたら示してほしい。また、歩くことによって骨密度が上がった、などのデータがあれば、やる気にもつながるのではないか。そのようなデータがあれば教えてほしい。

(事務局回答)

歩数計を使うことで歩くきっかけになりましたか、という質問に対して、「より歩くきっかけになった」と答えた人が45.8%、「どちらかというによく歩くきっかけになった」と答えた人が43.7%、合わせて約9割の方が「よく歩くきっかけになった」と回答している。骨密度についてのデータはない。

(ハンソン先生コメント)

この項目については世界的にも着目されている部分であり、指標4の「根拠に基づく取組」という側面から言えば、歩く歩数と骨密度の関係など、世界中に様々な事例があると思われる。そういった情報を根拠にすれば、これから取り組むことになる人にも参考になると思う。一度事例や研究成果を探して、ツールとして使ってほしい。また、来年申請書を作成する際にもそういったデータを示してもらえると、自分たちにとっても良い情報になると思う。例えば、1日1万歩歩けば良いとよく言われるが、おそらくそれにも根拠があると思う。実際に歩いている人と歩いていない人の差などのデータを見て、国などが言っているのではないか。そういう事例があれば示してもらえることで、何となくやっているわけではないという証拠になる。おそらくいろいろな見せ方があり、1万歩というのも一つの見せ方だが、30～40分の運動を週5回すれば1万歩に匹敵する運動になるという研究の成果を見たこともある。いずれにせよ、根拠に基づいた取組であるということを示せると、面倒だと思っている人もやる気になるかもしれない。来年申請書を記載する際も、根拠に基づいて取組を行っているということがアピールできると思うので、そういった情報が加えられると取組の広がりにも貢献できると思う。

また、歩こうと思うきっかけには環境も影響していると思う。車がたくさん走っていて歩きにくい環境だと、歩こうとは思わなくなってしまう。こういう道を歩けば安全、などという情報提供も役に立つのではないか。例えば昨日、事前指導が始まる前にスクールゾーンを改修した部分について実際に見せてもらい、車の交通量が多く、子どもが歩くのに危険だと思う箇所について、地域の方と話し合っただけで道路の環境を変えたという話を聞いた。車を1車線にして歩道を広くしているところがあったが、そんなに大がかりな改修でなくても車のスピードが下がっているという報告を受けた。そういったところをウォーキングのルートとして紹介するなど、コラボしても良いと思う。昨日は子どもの交通安全ということで紹介してもらったが、子どもだけではなく、日々ウォーキングをしている方にとっても「良い環境で歩ける」という取組になると思うので、スポーツ安全対策分科会の皆さまにも、共通の解決策として活用してほしい。もっと歩いてほしいと考えた時に、その方たちのモチベーションを上げることも大切だが、環境づくりという視点からも見てもらえると良いと思う。

#### ○ハンソン先生

指標4「根拠に基づいた取組」については、必ずしも学術的な専門家の意見を参考にしなければならないわけではない。スライドの10番について、日本の自治体は基本的に「ロジックモデル」を評価の方法として取り入れている。ロジックモデルは、壮大なプロジェクトを評価するのではなく、個々の取組についてどのような効果が出ているのかを見るのに有効だと言われている。世界中にはいろいろな評価の方法があり、ステップ1をプロセス評価（どのように取組が広がっているか）、ステップ2はそれによってどのような変化が生まれたか、ステップ3は変化が生まれたことによってどのような効果が生まれたか、そういった表現にしたほうが良いのではないか。

(白石先生補足)

日本ではロジックモデルを評価の基本としており、「短期」「中期」「長期」という軸で評価を行っているが、横浜市栄区ではそれを「ステップ1～3」という表現で評価しており、表現の違いはあるがやっていることは同じである、とハンソン先生に説明した。



(ハンソン先生続き)

多くの人は、運動不足だから運動しなければいけない、ということはすぐわかるが、だからといってすぐに運動するわけではない。そのギャップが非常に重要な部分である。それを図式しているのがこの図である。

(iPad で図を表示) ピラミッドの中に4つの階層があり、一番下は「知っている」、次の段階が「どうやってやるのかを知っている」、3番目が「どうやって見せるのかを知っている」、一番上が「実践している」という段階である。情報を与えた後にこういったステップを踏んでいかないと、なかなか人は行動に移すことができない。今日の報告を聞くと、「どのように知らせていくか」という部分は押さえられている。医療従事者として学ぶ知識のうちの一つだが、このような仕組みがあって人は初めて行動に移すということを頭に置きながら取組を実施していくと良い。まず知ってもらい、どのようにそれを実践するのか知ってもらい、それをどのように他の人に紹介できるか知ってもらい、最後に実践に移してもらう。医学生に教育する際に実践まで導くためのプロセスとして、私たち自身もこうした教育を受けてきたし、教育する際に注意している。皆さんの報告を聞いていると、きちんとこの段階を踏んでいると感じる。情報を伝えさえすれば実践すると思うのではなく、実際にその情報をもとにどうやったらそれを取り入れるのかということに着目した点が重要である。

スライド16番で運動不足とけがの関係をきちんと示しているのはとても重要。何のためにやっているのか、本当に役に立つのか、本当にけがが減るのかということを示す必要がある。よって、どういう人が研究をした結果を参考にしているのかを出典として書くことは大切。今回は出典を小さく書いているが、もっとしっかり示したほうが良い。申請書を記載する際にも、これは自分たちが勝手に良いと思いついてやっているわけではなく、きちんと科学的根拠を確認した上で導入しているということをアピールすることは、指標4「根拠に基づいた取組」であることを示す重要なポイントである。教授の顔写真でも入れたらもっと良いのではないかな。

スポーツ外傷には、まだまだ隠された問題もあると思う。特に、若い世代については、頭部に対する衝撃を受けやすく、脳震盪などを起こすことがある。10～20年前のオーストラリアでは、サッカーのヘディングなど、スポーツをしている際に脳震盪を起こしても問題ないと思われていた時期があった。しかし現在は後々大きな影響を与えるという意味でも非常に危険な外傷だと認識されている。何回もヘディングで脳震盪を起こすと、若い時にそれほど影響がないと思っけていても、脳へのダメージは積み重なっていて、歳を取った時に認知症を発症するなどという形で影響が出る可能性もあることも最近に着目されている。また、頭部に刺激を受けた後はしっかり休息を取るようにも言われるようになってきている。若い人は、刺激を受けた直後でも何も異常がないように見えるため、競技を進めることで他のけがを誘発してしまうことがある。先ほど言ったとおり、長い時間における度重なる脳への衝撃で傷害が起こるケースの他にも、若い世代に特有の短いスパンでの衝撃の連続によって脳が破壊されるというリスクも取り上げられている。このように、医学界では、その時は大丈夫に見えても後で出てくるかもしれないリスク、隠れたリスクについても着目している。よって、若い人の潜在的な頭部損傷についても検討してもらえればと思う。サッカーであれば、まずコートから出して、医学的な治療をしてほしい。皆さんの持っているデータも参照しながら、長い目で見ると大きなけがにつながっているかもしれない、隠れた問題がないかという視点も持ってほしい。

## 5 災害安全対策分科会

### ○チョ先生

日本に来るといつも感じるのだが、自治会・町内会の存在は日本ならではのものであり、自治会・町内会が果たす役割は日本において非常に重要だと感じる。特に、防災の分野では重要な役割を担っているのではないかと。自治会・町内会が災害を防ぐことは不可能なので、災害が起きた際のダメージをいかに最小限にとどめるかという「減災」に力を入れていると理解している。

日本のほとんどの自治体において自治会・町内会は存在しており、重要な役割を担っていると思うが、セーフコミュニティに取り組んでいるところと取り組んでいないところでは何が異なるのか。セーフコミュニティに取り組んでいない自治体でも防災には取り組んでいると思うが、セーフコミュニティに取り組んでいることにより何が異なるのか聞かせてほしい。言い方を変えると、セーフコミュニティが始まる前と後ではどう変わったか、教えてほしい。

(事務局回答)

セーフコミュニティが始まる以前の取組では、地域防災拠点の訓練が実践的なものではなく、消火器の訓練等、避難所運営とは言い難いものであった。セーフコミュニティの推進により公助の力が上がり、避難所運営訓練が進むようになった。

(チョ先生返答)

日本全国で防災訓練を行っており、形骸化しているところが多い中で、セーフコミュニティの取組を通して実のある、地域に根差した防災訓練になっているということは、私たちにとって感動的なことである。形骸化してしまうと、参加できる人のための防災訓練になりがちだが、栄区の場合は障害を持った方や高齢者、妊婦や小さいお子さんを持ったご家族、外国籍を持った方々をサポートの必要な方だと認識している。そういった方々の在り方は地域によって異なると思うので、サポートの仕方も地域によって異なる。そういうことを視野に入れて、実のある組織づくりや訓練の在り方を進めているのは素晴らしい。

### ○ハンソン先生

様々な取組をしている中で、きちんと効果を生んでいるところが非常に素晴らしい。取組のための取組ではなく、目的のために取組を実施しているところが大切なポイント。次のステップとして、より効果的にするにはどうしたら良いか、という部分にチャレンジしてほしい。先ほどの分科会の報告の後にも話したが、知っている人が行動に移すまでの4つの段階を「ミラーのピラミッド」という。日頃、私が医学生に公衆衛生を教える時もよくこの事例を使っている。例えば、喫煙する人の中には、「煙草が体に悪いことはわかっているが、他人に迷惑をかけていない」という態度の人もある。多くの喫煙者に「煙草をやめたほうが良い」と言ってきたが、「ただちに煙草をやめます」という患者には会ったことがない。なぜなら、煙草を吸っている人で健康に悪くないと思っている人はおらず、皆が健康に悪いと知って吸っているからである。この問題は、災害の予防に対する問題と似ていると思う。煙草を吸っている人がやめた方が良いと思いつつも吸っているのと同様、災害への備えは重要だと感じているにもかかわらず、感震ブレイカーを導入していなかったり、防災訓練にも半分程度しか参加していなかったりと、大切さを知っていながら実際に行動を起こしていない人とのギャップがある。煙草を吸っている患者に対して私ができることはというと、説教をすることくらいである。説教をしていると大概、聞いている方の意識が遠のいていくのを感じられるので、きちんと聞いてくれないというのが分かる。このように、私にできることは限られているが、私の妻は私より優秀な人で、妻がいつも私に言うことがある。それは、「教える前にまず聞け」ということである。既に知っていることを重ねて言って押し付けても限界があるので、「なぜしないのか」と聞いてみるということは一つの手段である。それは、当事者が「なぜしないんだろう」と考えるきっかけにもなる。私自身も私の妻も、医者としての毎日接しているが、医者としてあれこれ言う前にまずは患者に聞くように言っている。

今日の朝、2～3歳の子どもが一番よくする質問は何か？という質問をした。2～3歳の子どもが一番よくする質問は、世界共通で「なぜ？」である。それにしたがって、私も今皆さんに質問をしたい。なぜ防災訓練の参加者が思ったほど伸びないのか、皆さんも既に疑問に思っているのではないか。または、なぜ家具転倒防止のための対策を実践している家庭が思ったほど増えないのか、疑問に思っているのでは。皆さんがそのように「なぜ増えないのだろう」と思うことが大切である。なぜこれだけ啓発活動をしているのにやらない人いるのか、など、常にそういう部分にアンテナを立てていれば、栄区ならではの解決ポイントが見えてくるのではないか。

朝の報告の後にも申し上げたが、セーフコミュニティの取組をするにあたっては3つの専門分野があると思う。まずは研究者、地震であれば地震の専門家については、ハイリスクな場所や亡くなった原因等、専門家だからこその専門的な分野がある。そして行政の方については、行政だからできる専門分野がある。加えて、コミュニティの専門家がいる。コミュニティの専門家は、住んでいる皆さんである。栄区の専門家は、栄区の区民の方々である。研究者が「これをした方がいい」「あれが大切だ」などと言っても、コミュニティを知らなければなかなか実現ができない。皆さんは栄区の専門家、エキスパートだと思って、「なぜ」を追求していただきたい。栄区の専門家である区民の方々に「なぜ？」と聞いてみれば、納得できる情報が得られるかもしれない。「なぜ？」と聞いてみるのが1つの解決策になることがある。「なぜ？」と聞いてみることをきっかけに、何を伝えるべきかが分かってくる。それによって、提供する情報にメリハリもつくし、提供する方法も変わってくる。やる気を出すためのカウンセリングや話し合い、導きが重要なポイントである。高いところに立って「やりなさい」と言っているだけでは、誰も話を聞いてくれない。自分たちの側に一緒に立ち、一緒に道のりを歩んでくれる人だからこそ話を聞こうと思うのではないか。そういうスタンスで分科会の取組を進めてほしい。

「段階と変化の論理」というものがある。地域の方をひとくくりにして同じ情報を出しても、問題意識の度合いや準備の度合いが異なるので、情報がうまく伝わらないことがある。それぞれの状況や家族構成によってステージが異なるということも考慮できると、それぞれの的確なポイントをつつくことができ、よりの確にメッセージを伝えることができる、という理論である。どのようにそれぞれのポイントをくすぐれば良いか工夫することも一つの方法かと思う。

皆さんが正しい方向に向かって進んでいるということは今回確認することができた。「なぜこれだけ取り組んでいるのに100%の人が準備してくれないのか」を認識し、それを知っているコミュニティの専門家である区民の皆さんの傍らに立ち、一緒に旅をしていくように寄り添って取組をしていくところがセーフコミュニティの良さでもあるので、これからそのように取組を進めてもらえればと思う。今の報告を聞いて、これから非常に効果を生んでいくのだろうな、と思っている。繰り返しになるが、「聞く」ことでより効果的な方法を手に入れてほしい。

## 6 こども安全対策分科会

### ○チョ先生

様々な取組をしているという報告をしてもらった。例えば、小さい子どもに対しては保護者にどのようなリスクがあるか、またそれに対してどのように事前に対応できるかを周知しているということ、さらに社会的な環境を地域単位で整えていくための一つの事例として「こども 110 番の家」を活用しているとのことだった。こういった取組を通して、より子どもにとって安全な街になることを期待したい。

韓国の調査でも明らかになっているのだが、子どもが小さい時は、外よりも家の中でけがをすることを養育者が知ることが大切である。既に栄区では養育者にアプローチして情報提供し、それが実践に移されているか確認しているということで、それは非常に重要なこと。情報を与えているから親がそれを実践するだろうという考えは甘く、行動と知識はリンクしているわけではないので、そこに着目し、これからも工夫していくと良いのではないかと。行動していない人がどうすればこれから行動していくのかを考えていけると、さらに取組が広がっていくと思う。

学校との関わりについて、学校でのけがの話などに言及しているが、これは特定の学校に限定したものなのか、それとも栄区にある学校すべてを対象にしているのか。

(事務局回答)

アンケートについては、栄区内の小学校 14 校のうちいくつかの学校に協力してもらっている。

(チョ先生返答)

「こども 110 番の家」など、子どもが地域の中で怖い思いをした時に駆け込める家を作るシステムは、栄区に限らず、日本中で似たような取組が行われているが、栄区では実際にどのように使われているのか、活用された事例について教えてほしい。

(事務局回答)

「こども 110 番の家」については、それを家の前に掲げることによって、子どもたちを見守っていることが犯罪を起こそうという人たちにも伝わるため、犯罪抑止力とするところが大きな目的である。実際に駆け込んだ例というのは今のところない。

(白石先生補足)

怖い思いをした子どもたちが実際にいるわけだが、そういった子どもたちに 110 番の家に駆けこめばよいという認識はあるのか。

(事務局回答)

先ほどの報告にもあったように、小学生と中学生にアンケートを実施した中で、「怖い思いをした」という子どもは 30%程度いる。しかし、実際に駆け込みをしたという事例はない。

(白石先生補足)

それは、「こども 110 番の家に駆け込みましたか？」という設問はあったが、選んだ子どもがいなかったということか。

(事務局回答)

2016 年に取ったアンケートでは、実際に子どもが駆け込んだという回答はなかった。

(白石先生補足)

それでは、今後もしかしたら子どもたちが「110 番の家に助けを求めよう」と思うような工夫が必要になるかもしれない。

(片岡座長回答)

小学校に入学すると、1 年生は「通学路の周辺に 110 番の家がどのくらいあるか」を親子で散策して確認する。「110 番の家は何かあった時に駆け込める家だから、出入りして危険を回避するように」と親子で話し合い、さらに P T A が小学校等で保護者、子どもたちどちらに対しても話をする機会も設けている。よって、子ども

たちも地域の住民も 110 番がどんなものかはよく理解していると思う。また、先ほどあったように、犯罪抑止力という意味でも、たくさん 110 番の家があることによって地域が犯罪者から守られているということを示せている。

### ○ハンソン先生

私からは 3 つのポイントに絞って話をしたい。1 点目は、より効果的に成果を生むための情報提供である。2 点目は、私からの情報提供をもとに皆さんで話し合ってもらいたいことであり、場合によってはそれが皆さんの取組の役に立つと思う。3 点目は、オーストラリアで取り組んでいる事例の紹介である。

その前に、スライド 4 番について、表の割合をすべて足しても 100%にならないが、なぜか。

(事務局回答)

こちらのアンケートは、1 人につき複数のヒヤリハットを経験している人がいるため、すべて足すと 100%を超えている。

(白石先生補足)

それは、複数回答を可としているということか。

(事務局回答)

その通り。

(ハンソン先生返答)

それでは 1 つ目に、皆さんの取組がより効果的になるようにという視点から話をしたい。皆さんデータをうまく収集して取組に使っていると感じた。例えば、救急搬送のデータも使っているし、保護者の方にもアンケートを取っている。取組のゴールがしっかりしていないと、何のためにやっているのか分からなくなってしまうが、日本の場合はロジックモデルというものを使い、目標を定めて評価しているため、取組の方向性と到達点を定めて進捗状況を確認しているという意味で良い評価方法だと思う。まずしっかりとデータを確認して、何が問題点かを確認した上でゴールを決め、それによって取組を進める中で、何が変わってきているのか、きちんと目標に向かって変化を続けているのかを確認していると考え、質的な取組の確保をするサイクルができていると感じる。スライドの 11 番などは、それを端的に示したものだと思う。行き当たりばったりではなく、プロセスをきちんと確認しながら進めていることは重要で、取り組む前はこういう課題があったからこの取組をして、取り組んだら新しい課題が出てきたのでこういう課題を設定した、ということを論理的に示すことで、進め方を理解していることも示せていると思う。今はまだ変化がないかもしれないが、長い目で見ると、「目標に向かって進んでいるかどうか振り返りをしっかりしていく」という今のやり方を続けていくことで、分科会の取組が将来に向かってよいものになっていくと思うので、この取組の進め方を忘れないで続けてもらえればと思う。

次に、皆さんの取組が次の認証に向けてよりよいものになるためにコメントしたい。昨日の午前中から何度か話しているが、皆さんが大人だとしたら、私は 2 歳の子どものようなものである。皆さんほど日本のことをよく知らないし、何をやっているかもわからない。よって、知らない方に理解を進めていただくことを前提に、どんな情報が必要か、何を提供したら良いかということを考えることが大切だと思う。例えば、文化的な側面を説明しなければ理解できないこともある。2 歳児に説明するような気持ちで考えてもらえれば良い。その時に気を付けなければならないのは、ここで言う K Y T のような略語である。K Y T は危険予知トレーニングの略で、日本人にしてみれば納得できるが、英語圏の人が聞いても何のことかわからない。他の分科会にもすべて言えることだが、申請書を書く際やパワーポイントの資料を作る際などはそういったところに注意して、欄外で説明するなどの工夫が必要。それは日本人が見てすぐわからないことについても同様である。審査員がそこに引っかからないよう、工夫することを心掛けておいたほうが良い。申請書と補足説明書で併せて 100 ページに及ぶこともあるが、読んでいてわからないものがあるとそこに気を取られてしまい、本当に読んでほしい、他の大切な部分を見てもらえなくなってしまう。今回、K Y T について口頭で説明もあり、通訳もしたが、話

す速さに理解する速さが追いつかずに通り過ぎてしまった。セーフコミュニティに取り組んでいるいくつかの自治体がKYTに取り組んでおり、成果も出しているの、KYTの取組をPRすることも重要だが、「もうこんなに成果が上がっている」ということを示すと、より将来の成果が約束されることになる。申請書の作成やパワーポイントの修正の際には、大学の先生の調査の結果や他の自治体でけがが減っているという成果を補足情報として付けておいたほうが確実にプラスになるので、ぜひ付けてほしい。つまり、皆さんの取組をより効果的に審査してもらうためにKYTを事例にとって説明すると、KYTとは何かという説明をもう1枚くらい増やしても良いかもしれない。まず、KYTとは何かを説明し、実際にこういうところで実施されている、という説明を入れられると、理解を深めてもらうことができると思う。またそれは、セーフコミュニティの指標4「根拠に基づいた取組」を示すことにもなる。根拠については、大学の先生の論文でもかまわないし、他の自治体の成果を示してもかまわない。必ずしも学術的な論文が必要なわけではなく、どこかで実施しただけが減ったという実績があったので、そこから学んだ、という形で紹介すれば、審査員の理解も深まるのではないかと。検討してもらうことをおすすめしたい。

また、分科会の問題ではなく全体的な問題なのかもしれないが、栄区の場合、ロジックモデルを使っているがその中で「ステップ1～3」という独自の言葉を使っているの、ロジックモデルの中でステップ1～3がどのように位置づけられているのかという全体像を示すことができると良いのではないかと。ロジックモデルでは、突然しっかりしたゴールが作られるので、それに向けて意識の変化、意識の変化による行動の変化、行動の変化によるけがの減少という3ステップで評価されているということを示せば、よりゴールと評価がつながると思う。支援センターもこの部分についてはもう一度一緒に考えていきたい。

少し技術的な問題になるかもしれないが、我々審査員は漠然と報告を聞いているわけではなく、取組が良くなるためのアドバイスをすることと、審査に向けてより効果的に進めることという二つの目的があってここに来ている。私もチョ先生も大学で教えているので、学生と面談をする際、ちゃんとわかっているかを確認するために、特定の言葉を言うかどうかのチェックリストを作成する。本番の審査でも、審査員は7つの指標についてチェックをしながら聞いているので、指標のどれに該当するのかわかるように工夫をすると、栄区の取組が7つの指標に沿っていることをすぐにわかってもらえる。行き当たりばったりで進んでいるのではなく、ロジックモデルをベースにやっていること、また根拠に基づいてやっていることをアピールしてもらえると、皆さんがセーフコミュニティのやり方に基づいて取組を進めていることがより審査員に分かりやすくなると思う。

昨日も同じことを話したが、「ミラーのピラミッド」というものが存在する。まさに今日の報告の中にもあったことだが、知っていることが実践することとイコールではないことを示すものである。知っているからと言って、その人たちが子どもの安全のために家の環境を変えるかということ、そうではない親がいる、というのが一つの良い事例である。知っていることと実践することの間には常に大きなギャップがある。ミラーのピラミッドは4段階であり、知っている人から行動を起こす人までだんだんと人数が減っていく。そのギャップを埋める一番良い方法は、やらない人になぜやらないのか聞くことである。なぜなら、対策をやらない母親は、やらないことに関してエキスパートだからである。なぜやらないのかという理由は、彼女たちが知っている。教えて受け入れないということは、何回同じことを強く言ってもだめで、彼女たちが変わらない限りは変わらない。なぜ変えないのかということは、変えないことの専門家に聞くのが一番良い。教える前にまず聞くことにチャレンジしてほしい。また、その方たちを批判するのではなく、私たちも一緒に同じ方向を向いて、仲間として変わっていききたい、という姿勢で取り組めばうまくいく。どうしてやらないのか聞いた後は、聞くだけにするのではなく、きちんとどこかに反映させることがポイント。そうすることで、自分には関係ない、私には私のやり方があると思っている母親たちも、自分もチームの一員であると考えて聞いてくれるようになる。そして自分の意見を取り入れてくれているとわかれば、一緒に歩いてくれるようになる。そうやって、うまく

メンバーとして、こちら側に巻き込んでいくことも重要。私の妻はとても賢い人だが、その妻がいつも私に「言う前にまず聞け」というアドバイスをくれるので、彼女からのアドバイスでもある。

最後に、オーストラリアの事例を参考に紹介したい。ACE (Adversed Child Event) というものがある。スコアになっており、子どもたちに対して、児童虐待の被害に遭っているか、親が離婚したか、などのチェック項目がある。何のためのスコアかということ、子どものさまざまな状況を確認し、どういう経験がある子どもが将来どういうリスクを負うかということを確認するためのスコアである。例えば、犯罪に手を染める、不登校になる、貧困になる、鬱になる、などといったリスクについて、子どものときの環境が長い人生の中でどう影響を与えているかということスコア化している。なぜそういったことを行っているかということ、皆さんご存知のように、子どものときに虐待を受けた人は、自分が大人になったとき子どもに虐待をしたり、DVの環境の中にいた子どもは自分も同じようにDVをしてしまったり、問題が一時で解決しているのではなく、人生の中の次の問題につながっているということがよく言われているからである。子どもがどのような人生を送るかについては、最初の数年間の影響を強く受けると言われている。早い時期に、これから起こるであろう問題の芽を早く見つけて早期に公的に、あるいは地域や家庭で介入し解決できれば、子どもの将来はずっと良いものになるし、犯罪の予防や鬱の予防、自殺の予防になれば、社会コスト的にも非常に有効だと言われている。

また、日本ではどの程度重要な問題なのか私もわからないが、オーストラリアで非常に大きな問題となっているのが、インターネットにかかわる問題である。今回皆さんは犯罪のことについて言及していたが、オーストラリアではそれに加えてネットいじめ、特に10代の女の子のネットいじめが大変な問題になっている。例えば、フェイスブックで個人攻撃をするなど、バーチャルの世界で実際と同様のいじめを行うことで、子どもたちは非常にストレスを抱えることになり、自殺にもつながっていく。よく言われるのが、女の子が男の子と付き合っていて、個人的な写真を送ったり、一緒に写真を撮っていたりしていたが別れてしまい、リベンジポルノをされるなど、インターネットをきっかけに事態が大きくなっているということがオーストラリアでもよく言われている。インターネットのいじめについては未知数なので、日本でもこれから起こり得る課題として見きわめながら取組をしてほしいと思う。

## 7 児童虐待予防対策分科会

### ○チョ先生

今の報告で、栄区はセーフコミュニティの取組を始める前から児童虐待の対策に力を注いでいると感じた。セーフコミュニティを導入したことで、どのように何が変わったか、良くなったか、セーフコミュニティに取り組んで良かったと感じられる部分について教えてほしい。

(事務局回答)

セーフコミュニティ活動を通じて、虐待予防対策に関する理解が深まったと感じている。地域の特性に応じた子育て支援の取組や世代間交流等が広く行えるようになった。

(チョ先生返答)

父子手帳(パパノート)は面白いアプローチ。残念ながら私は子育てがもう終わったので直接関係はないが、最近孫が生まれたので、息子に渡したいと思う。

### ○ハンソン先生

スライド29番について、何人にアプローチしたのかということも大切だが、それがどれだけのカバー率か、どれだけの家庭に必要な情報が届けられたか、手を差し伸べることができたかということが非常に大切。ここで見る限り、2016年には9割を超える家庭を訪問して、必要な情報を提供し、母親と接することができたと示されており、素晴らしいことだと思う。これは指標の2に関わることで、すべての住民、すべてのエリア、すべての状況に対する取組がされているかを示す部分になる。子どもに対する取組があるというだけでは不十分で、必要な方々にどれだけ届いているかということが重要。例えば、対象者のうち1%しかカバーしていないプログラムだとすれば、それは事業として存在していても有効ではないと言える。カバー率を示すことは、指標の2に関わる部分として非常に重要である。公衆衛生の分野でよく使う「公式」がある。 $I = E \times R$ という公式である。この公式は、I (Impact・影響や変化) はE (Effective・効果性) とR (カバー率) によって変わるということを示す。どんなに効果が高い取組をしていたとしても、それが必要な人に1%しか届いていなければ意味はなく、効果がある取組を対象とする人にたくさん提供できなければ、大きな変化は生まれない。このスライドを見る限り、対象としている人の9割以上をカバーできているということは、大きな変化が生まれることを予測させるものである。例えば、やったら必ず効果が出る、効果率100%の取組があったとする。ただ、家庭訪問を24時間し続けるなど、すごく手間がかかる取組だったとする。確実に成果が出るけれど24時間365日ついていなければいけないということになると、栄区で年に1人か2人しか実践できないということになる。そうなった場合、先ほどの公式に当てはめると、100%の効果がある取組にもかかわらず、対象者700人中1人しか実践できないとなると、カバー率が0.02%になり、この取組で起こすことのできる変化の数字は小さくなってしまう。逆のことを考えると、この取組のようにカバー率が高い、例えばカバー率100%の取組があったとする。絶対誰も読まないチラシを作り、全対象者に配布したとすると、効果率0~1%なので、それは効果がある取組とは言えない。カバー率が高ければ良いというわけでもなく、カバー率が高いだけで効果が低ければ、それは変化を生まない取組だということになる。今回皆さんの報告を聞きながら、この公式にどのように当てはまるのかと思っていた。この取組はカバー率が高いことが示せているので、効果的だということをやより客観的に示すことができれば、おのずと $E \times R$ で変化、成果が約束されることになる。どれだけ効果があるかを示すことは簡単ではないが、どういう風に示せるかを工夫すれば、本番に向けてこの取組が成果を生んでいることをアピールすることができる。91%のカバー率というのはただ良いだけではなく、とても良い数字だと思う。

スライド4番について、ここで言いたいのは、子どもの世話をした経験がないから子どもを初めて持った時にどういう風に対応したら良いかわからず孤立してしまい、そのために児童虐待に走りやすいということだと思うが、論理的にそれを説明することはできるのか。また、スライド7番~9番について、いろいろとデータを示しているが、事実を示して「〇〇が必要」となっている部分に関して、「なぜ？」と思うところが多い。



例えば、スライド7番については、横浜市と栄区の違いを虐待の種別で比較しているが、だから子育てサポートが必要なのはなぜなのか。なぜ心理的虐待が多く、それがなぜ子育てサポートにつながるのかという説明が聞いていて掴み取れなかった。スライド8番については、横浜市と栄区の虐待者別の割合を示しているが、どちらも加害者として実母が多いのはなぜなのか。オーストラリアでは虐待者は実父が多い。また、スライド12番について、どうしてここに書かれていることが分かるのか。なぜ地域全体で子育てを見守る地域づくりが必要なのか。なぜ地域のつながりの希薄化によって育児が孤立化しているのかなど、4つの項目がどうやってわかったのか。初めて聞く者には、やっていることとその理由、背景が繋がらない。おそらく日本人としては社会情勢や国民性が何となくわかっているため、自分たちで行間をつなげているのだろうが、海外の者には行間をつなげるだけの情報がないので、なぜこういう風に言えるのか、唐突に見える。もしかしたら、厚労省が出しているデータや横浜市が調査した虐待に関する白書があり、それを見ればここに書かれていることが分かるのかもしれないが、そういったものがあれば裏付けの資料として示してほしい。そうすれば、勝手な思い込みではなく、きちんと事実に基づいて段階的・論理的に整理している、根拠を活用して取組をしているということが分かり、指標4を満たすことにもなるので、審査員にとっては理解しやすくなる。もし、乳幼児健診の際のアンケートなどをまとめてここに書いているのであれば、それをきちんと示したほうが分かりやすい。

(白石先生補足)

前の方に記載されているデータとリンクしているのであれば、「グラフ〇番より」のような形で記載するとわかりやすいかもしれない。

(ハンソン先生続き)

12番目、13番目のスライドは、なぜこの取組をしているのかということを理解してもらうために、非常に大切なポイントになると思う。審査員としては報告の内容を理解したいと思うので、より理解を深めるために今伝えたような情報を追加してもらえれば、やっている取組の理由を知ることができ、納得できる。本番に向けてそういったところを準備してほしい。それこそがロジックモデルの考え方なので、もう一度照らし合わせて整理すれば、よりクリアなものになるのではないか。日本セーフコミュニティ機構の白石さんや今井さんも一緒に整理してくれると思う。

一つ、オーストラリアでの失敗談を紹介したい。よくあるパターンとして、公の場で関係者が集まって会議をする際、それぞれ専門の分野において「〇〇をしなければならない、〇〇をする必要がある」と言うことがある。しかし、「私たちは〇〇する必要があります」とそれぞれが言うのではなく、何が問題であるのかを最初に全員で共有することが一番大切なことである。何をしなければならないというのはその後にくることであり、最初にその場にいる全員、分科会であれば分科会で、何が問題かという共通認識を持つことがとても大切。往々にして関係者の方々はそれを飛ばして、「〇〇をしなければならない、〇〇が必要だ」という話をしてしまう。「〇〇が必要だ」ということは、その背景となる問題の解決にはならない。手段が目的化してしまっているということになる。オーストラリアのセーフコミュニティを進める際によく使う、「Flip Program」というものがある。Flipとはホットケーキなどを「ひっくり返す」という意味。両面をひっくり返しながら上手に焼かなければならないという意味がある。まずは、「何が問題か」ということを片付ける必要がある、その問題は自分の経験や思いつき、直観で言うのではなく、きちんと根拠に基づいて「これが問題だ、この問題を解決しなければならない」ということを明らかにする必要がある。これが、ホットケーキの最初の面。何が問題か、何を解決しなければならないのかをしっかりと設定し、それを皆さんで共有できれば、結果としてその後の取組が非常にやりやすくなる。まさにホットケーキと同じで、しっかりと片面を焼いていけば、ひっくり返すのも楽。このプログラムはそれに例えられている。思いつきや勘ではなく、いろいろな情報を精査して問題がきちんと認識、設定できていけば、ひっくり返した時に綺麗に解決策が出てくるということになる。その解決策は必ずしも1つではなく、オーストラリアと日本が必ずしも同じわけでもない。論理的なつながりをしっかりと設計することが大切であり、問題点や何を解決しなければいけないのかということがはっきり認識できたら、

あとは「誰がそれをやるのか」、「何に対してやるのか」「いつやるのか」「どこでやるのか」「何をやるのか」「どのようにやるのか」ということがおのずと決まってくる。そのやり方は国によって異なるし、コミュニティによって異なる。ここさえしっかりと決まればおのずと成果は出てくるし、評価もしやすい。このスライドに対して、今日私は「なぜだろう」という大きなクエスチョンを持ってしまった。それが象徴的だったのでこの話をしたが、皆さんが間違っているというわけではなく、情報さえ補足してもらえれば成果がよくわかると思う。今後に向けての参考として話をさせてもらった。「Flip Program」はオーストラリアのセーフコミュニティで導入されているモデルであり、きっと支援センターが日本語に訳して皆さまのお手元に届くと思うので、一度見ていただき、今日報告してもらった今までの取組に当てはめてもらえれば、どの情報があればもっと分かってもらえるのか整理できるのではないかと。

## 8 高齢者安全対策分科会

### ○ハンソン先生

これから私がするコメントは、分科会委員の皆さまだけではなく、聞いている皆さまにとっても参考になる、一緒に考えていただけるようなコメントにしたいと思う。

審査員は、私たちのように国境を越えて日本にやってくる。私の場合、オーストラリアから10時間以上かけて夜通し飛行機の中で過ごしてきた。昨日朝から活動して今日2日目になり、お昼を食べた後で集中力が欠けてきている。振り向いて後ろの方を見ても、寝ている方もいらっしやる。これは、皆さまの報告が悪いというわけではなく、たまたま運悪く2日目のお昼の後の最初の報告にあたってしまったという、運の問題である。本番でも、2日目のお昼の後、最初のプレゼンは非常にチャレンジングだと考えておいたほうが良いかもしれない。今回、高齢者の分科会はくじ運が良かったのか悪かったのかここに当たってしまったと捉えることができる。だからと言って、皆さんの取組や報告が悪かったと言うつもりは全くなく、皆さんのご報告がこの2日間の中で一番良く分かった。逆境の中で素晴らしい報告をしていただいたと思う。

スライド22番と23番について、ここでは同じ内容を違う方法で示していただいた。

(聴衆席に向かって) 皆さんにお伺いするが、22番と23番のスライドはどちらが良いと思うか。どちらの方がよく状況を伝えていると思うか。

誰を対象にして情報を伝えるかによって、同じ内容でも異なる方法を使って伝えることができる。英語のことわざで、「1つの絵や写真は1000語に勝る」というものがある。22番のスライドでは、文字で書いてあることを一つずつ読まなければならない。集中して見ていかなければ、どこが大切なのか、何をチェックしなければならないのかが分からなくなってしまう。ただ、これが必ずしもだめなわけではなく、「誰に」「何を」伝えたいのかによって伝え方が変わってくるということである。そのために、4つのことを考える必要がある。まず、「何を示したいのか、ストーリーは何なのか」ということ、そして「何をを使って示しているのか」ということ、これは例えば今はパワーポイントを使っているが、他の方法も検討する中で何が一番効果的なのかを考える必要があるということである。そして、「誰がそれを伝えようとしているのか」、「誰に伝えようとしているのか」ということである。ストーリーをいかに伝えるかということが重要で、それは今回のことや日本だけに限らず、私たちの日常生活の中で大切なことであるし、例えばオーストラリアの原住民の方に対してでも、すべてのことに当てはまる。注意しなければならないのは、私たちはいろいろなことを伝えたいがために、たくさんのことを一気に言ってしまうが、何を伝えたいのかをきちんと整理して、ストーリーを持って伝えないと、聞き手は3つ言ったことについて後から1つしか覚えていない、ということになってしまう。平均で1つしか覚えてもらえないような内容を、どのように示せば3つ覚えておいてもらえるかという視点で考えることも、本番に向けての一つの挑戦として受け止めてもらえるのではないか。プレゼンが終わった時に何も覚えていなかった、ということがないように、少なくとも一つのことを覚えてもらうための際のポイントは、「何を一番覚えておいてもらいたいのか」「何を一番伝えたいのか」ということをイメージしながら伝えることである。それは今回だけに限らず、地域の方に情報を伝える際もそこを意識して工夫をすれば、もっと広がりが出てくると思う。

(チョ先生コメント)

私は医者なので医者立場から言わせていただくと、「ヒートショック」というのはピンとこない。もしかしたら和製英語かもしれない。説明を聞けば何のことかは分かるが、英語として聞くと不自然に感じるので、どういうものを説明してもらえて良かった。健康な人は、血圧の差がこれだけあっても問題はない。問題なのは、お風呂に体を沈めて血圧が下がり、一気に出た時に脳に血流が十分にならなくなることが問題。日本人の習慣として、熱いお風呂に肩まで長く浸かるというものがあるが、急に立ち上がった際にフラフラとしてしまうことが危険。そこで、この環境で何を改善する必要があるかということ、例えば手すりを付けてフラフラし

た時に掴めるようにしたり、お風呂に入った後、立ち上がる時はゆっくり立ち上がったたり、という工夫が必要になる。

(ハンソン先生続き)

皆さんのやってきたことを示す方法、プレゼンテーションの方法について、必ずしもパワーポイントでプレゼンテーションをしなければいけないというわけではない。皆さんが次回もまたお昼の後だったら、今度は実際こういう家に私たちを連れて行くなど、体を動かすことによって私たちの集中力を上げることができるかもしれない。この分科会だけでなく、全体的に言えることだと思うが、パワーポイントだけではなく、現地の視察も上手に組み込むなどの工夫をすると良いと思う。昨年、フィンランドの外傷予防会議で報告させていただく機会を得た。基調講演だったので、最初は普通の講演会として始めたが、30秒くらい経ってから、独り舞台のような形でプレゼンをさせてもらった。なぜなら、私は観客の方々に「何をやっているのだろうか？」と関心を持ってもらいたかったのと、聞いている方たちにも一緒に考えてほしいと思ったからである。私のように劇をしるというわけではないが、伝える方法はいろいろある。パワーポイントはそのうちの効果的な一つの方法だが、唯一の方法ではない。私の場合は、自分のスタイルとして動き回るが、そうやって動き回って報告するのも一つの方法かもしれない。

(チョ先生コメント)

アジア人には動き回ることは難しいかもしれない。

(ハンソン先生続き)

動き回ることが良いと言っているのではなく、どうやったら効果的に注意を引き付けられるのかを考えるのも一つの方法だということ。

また、「誰が聞くのか」ということについて、例えば今回の場合はどちらも医者である。よって、医学的用語に敏感になり、ヒートショックについても何か違うと感じてしまう。今回のプレゼンに限らず、いろいろなところに行って出前講座をする際なども、誰が聞いているのかによって、写真のほうの方が分かりやすいところもあるし、数字のほうの方が伝わりやすいこともある。相手は誰かということにも視点を向けて取り組むと、同じ情報でもより多くの情報が伝わる。学者の先生については、数字の方が良いかも知れない。ただ、写真は見せるだけで「部屋の外が寒くバスタブが深い」ということを納得させることができる。そう考えると、両方出している皆さんの方法が一番良いのかもしれない。私は写真が好きなので、皆さんの中にこの写真を撮った方がいるなら、細工をしたほうが良いとアドバイスしたい。例えば、青い光を使うととても寒そうに見えるなど、視覚的な効果を使うことも一つの方法である。また、浴槽からは湯気が立っているようなイメージにすると熱そうに見え、寒い脱衣場から熱い湯船に飛び込むことが想像しやすい。今回、非常に素晴らしい効果的な方法で、外国の者には馴染みのないヒートショックの状況を説明してもらえた。本番に向けて、「どのように情報を伝えたら良いのか」という考え方を伝えるちょうど良い事例だと思ったので、後ろに座っている皆さんにも同じように考えてもらいながら説明させてもらった。

## 9 自殺予防対策分科会

### ○チョ先生

韓国も日本と同様、自殺が大きな問題になっていて、ハイリスクの方々が存在する。韓国の場合、特に大きな問題となっているのが、治癒が難しいと言われる病気にかかった方の精神的なリカバリーであり、そういった方々がハイリスクになっている。そういう方々に対しては、医療機関としてのアプローチも難しく、栄区でもスライド8番にあるように「病気の悩み」というものが自殺の原因として大きくなっているようだが、日本全体でも同じような状況なのか。また、どのような形でそういった方々に関わっているのか。

(白石先生補足)

病気というのは、精神的な病も含めてということか。

(チョ先生返答)

精神的な側面を含まない、がんや脳梗塞やパーキンソン病などの病気について、そういった病気にかかった方たちにどのように対応しているのかを聞きたい。

(小田原座長回答)

日本では、亡くなった方のご遺族に対して死因を確認するシステムができていないので、死因に直結する健康問題が正確に評価できるかがわからないという前提でお話したい。日本には、病院医療評価機能機構というものがあり、そこで院内での自殺を把握するという試みが進んでいる。そこでは、がんの患者やその他の慢性疾患、治癒できない進行性の疾患の方の自殺が報告されているので、そういうケースについては、様々な体の状況や支援状況等を正確に評価できる。そのような事例を通じて、予防的な方法を講じていこうという試みが進んでいる。

(チョ先生返答)

韓国だけなのかもしれないが、病院で自殺するというケースは非常にまれであり、どうしてそういうことになるのか分からないので聞かせてほしい。

(小田原座長回答)

韓国と比べてどのように文化的な違いがあるからそのような行為に及ぶのかということがわからないが、少なくともそのようなことに目を向けて、数を把握し始めているという取組があることは大事なことだと思う。

(白石先生質問)

院内での自殺の数というのは多いのか。

(小田原座長回答)

ついこの前も報告が出たが、一般病床の中でもそれなりにあったと思う。現在正確な数を把握していない。

(白石先生質問)

そんなに珍しいケースではないということか。

(小田原座長回答)

精神病床に限らず、一般病床でもいろいろ出てきているということがわかっている。

(白石先生コメント)

審査員の先生方は、医者として関心があるのだと思う。

(小田原座長回答)

私の発言の意図としては、そういった病気等の細かい状況が分かっているケースを通じて、一般的に病気を患っている人たちへの自殺予防対策に反映するような知見を重ねていくことが重要だということである。

### ○ハンソン先生

スライド4番について、このグラフを見て、大きな変化を生み出していると感じた。自殺を予防するというのは、どの国でも非常に難しいチャレンジだが、栄区の自殺率の傾向を見ると、全国や横浜市と比べても減ってきており、嬉しく思う。このグラフが示しているのは実際に自殺された方の状況だが、自殺というのはその

方だけの問題ではなく、その方を取り巻く方々、ご家族にも大きなダメージを与える。そのようなことを考えると、自殺率が減少したことで、数字には表れていないが、周辺に与えたダメージ、社会に与えたダメージが大きく軽減されたということが説明できると思う。素晴らしい成果を積み上げてこられたと思うので、今までのご尽力を誇りに思っていたきたい。また、栄区のすべての報告に共通することだが、セーフコミュニティを通しての気づきや学んだこと、何が変わったのかということを確認している。さらに、現在何が課題か、何を問題点として抱えているのかということを確認し示しており、それに対して今後どのように取り組んでいくかという、3つのポイントを最後にまとめて示していることは素晴らしい。問題を認識しているということは非常に大切なことなので、それに対して実際にどのような方向で取り組んでいくかをきちんと示している。素晴らしい取組をされているという自信を持って、これからも続けていってほしい。

今回は事前指導に対するコメントということで、本番に向けてさらによくなっていくために、2つの側面からアドバイスしたい。1つはプレゼンテーションに関して、もう1つは取組に関しての内容である。自殺はいろいろな背景が複雑に絡み合っていて、それらのストレスを処置する方法として自殺を選んでしまう。最後の方法である自殺に至る経緯は皆異なる。若い女性と若い男性も異なるだろうし、歳を重ねた女性と男性も異なる。そういう部分が見えてくると、人によって取組のバランスを変えることもできる。ただここで問題なのは、この人数ではそういったことを統計的に見るのは難しいということ。そうするとどうしても、ケースごとに背景を見ていくことになるのかもしれない。

(小田原座長回答)

非常に重要なご指摘で、だからこそハイリスク者支援検討部会を立ち上げて、ハイリスク者が自殺をするケースをきっちりと解析していくことが大事だと考えている。

(ハンソン先生続き)

時間がかかるだろうし、ケースごとに異なるとは思いますが、そういう地道な積み重ねが問題解決につながる情報を得る方法だと思う。ある程度仮定をしながら進めていくことになると思うが、私の予想では、若い方はうつ気味だったり落ち込んだりするの、仕事がなかったりして思いつめている状況かもしれない。歳を重ねた方は同じうつ気味や思いつめる背景として病気が関わっている割合が高いかもしれない。40代の方であれば、職場の問題が大きく関係して、自分の面子を失ったとか、恥ずかしい思いをしてしまったとか、そういうことで自分を追いつめてしまっているのかもしれない。そういったことを一つずつ確認し、何が大きく原因しているのかを見ていくことになるかと思う。

(小田原座長回答)

アンケートにもあったように、多面的な支援を行っていくことが重要だと考えている。

(ハンソン先生続き)

今、最初のステージとしてハイリスクの方々に手が届きつつあるということが、数字の変化に現れているのだと思う。次のステージとしては、より難しくなるかとは思いますが、もっと前の段階で、ハイリスクにならないための予防をする方向に向かえると良い。そちらの方が数段難しいとは思いますが、そのように次の段階に進まれることを期待している。

(小田原座長回答)

セーフコミュニティでこのような取組をすることで、究極的には「ケアサポート」、区民の方がお互いに助け合って一次予防につなげるということが大切だと思う。

(ハンソン先生続き)

自殺予防の取組というのは、「これをしたから終わり」というものではないと思う。状況を見ながらいろいろ取組をして、良くなった部分とそうでない部分を見きわめて、新たな取組を検討して、再び取組による変化を見て…というように、Step by stepの取組をすることによって、だんだん取組が成果につながっていくと思

う。皆さんの取組の中では、ゲートキーパーの取組などが1つの変化を証明しているものだと思う。引き続きの取組を期待している。

## 10 交通安全対策分科会

### ○チヨ先生

免許の返納について、日本では自主的に返す仕組みを推進しているとのことだが、それに加えて、「この歳になったら絶対に免許を返納しなければいけない」という決まりはあるのか。

(近藤委員回答)

75歳以上の高齢者については、適性検査と認知機能検査をクリアして、本人が引き続き免許を取得して運転する意思があれば取得することができる。また、通常は更新時のみ認知機能検査があるが、それ以外にも日常の運転の中で認知症が原因と思われる交通違反等があれば、臨時の認知機能検査を受けなければならないように道路交通法が改正になっている。

### ○ハンソン先生

非常に関心深い報告で、さらに取組を通して成果が出ていることを聞いて嬉しく思う。この分科会は、統計データを使って「なぜこのような取組をしているのか、そこに至った経緯」をうまく示すことができていると思う。スライド15番について、子どもの自転車事故による死傷者数が減っているから子どものけがも減っていると理解して良いか。また、なぜそのように考えることができるのか。

(森座長回答)

子どもが減っていることで事故が減っているというのもあるが、ヘルメットの着用率が増えたことにより事故が減っていると思う。

(近藤委員回答)

はまっ子交通あんぜん教室の話も写真で紹介したが、子どもに対する様々な交通安全活動、安全教育を地道に繰り返し行っていることによって件数が減少していると考えている。

(ハンソン先生返答)

スライド25番について、これも環境が改善されたことで変わったというロジックで良いか。いろいろな要因が関わっているので、先に「環境を改善した」ということをアピールしてはどうか。

(白石先生補足)

そうすると、目標と必ずしもマッチしないことになってしまい、かえってややこしくなるのではないか。

(近藤委員回答)

環境の改善については、効果が結果としてそのまま出るということはないかもしれないが、安全教育や道路の改善等が連動して減少の効果を生んでいると考えられる。

(ハンソン先生返答)

スライド24番について、モデル地点が2つあると思うが、モデル地点②のほうが①よりも大きな改善が見られる。なぜ②のほうが大きな改善があったと考えているか。

(事務局回答)

モデル地点②のほうがスピードが出ており、最高速度がかなり抑制されているからだと考えている。

(ハンソン先生返答)

今から皆さんにお見せするのは、根拠に基づいた取組を説明する際に使える図である。自動車のスピードについては世界各国で研究がなされており、10km時速が減ることにより、人が受けるダメージがどれだけ異なるかを示している。根拠に基づいた取組だと説明するためには、なぜスピードが減少したことが成果だと言えるのかをまず示さなければならない。そのために、こういったものを見せて、スピードが約10km/h減るとこれだけ衝撃が減るといって見せられると、より分かりやすくなるのではないか。

(近藤委員回答)

その通りだと思う。神奈川県警でも、速度取締りを行っているのは事故防止のためである。スピードが出ていると事故の被害が大きくなる。それを軽減するためには速度の取締りをする必要があり、神奈川県警のホー



ムページでも被害の拡大を防ぐために速度取締りをしていることを示している。先生のおっしゃった内容をプレゼンテーションに入れることで、理解度を高めることができると思う。

(ハンソン先生返答)

そう言ってもらえると心強い。うろ覚えだが、オーストラリアで見た文献によると、60km/h から 50km/h になったことで衝撃が半以下になるということもある。そういった内容を示すことで、環境改善への地域の理解も進むし、スピード超過が良くないことであるとドライバーにも知ってもらえると思うので、期待している。本番に向けては、「なぜスピードを落とす意味があるのか」というところをしっかりと示すことと、車の減速によってどれだけ事故が起きた際の致死率が変わるかなどを併せて示すことができれば、取組をする理由として説得力が増すと思う。審査員が誰になるかわからないが、セーフコミュニティ指標4「根拠に基づいた取組」をきちんと行っているというアピールにもなる。指標4は、セーフコミュニティを進める上で非常に大切なポイントとなるので、そこをきちんと押さえているということをアピールするという意味で頑張してほしい。その際、自分たちが独自に作り上げた情報ではないということを示すために、「〇〇から得た情報だ」という根拠となる出典を書いていると、審査員が後から確認をすることもできるので、忘れないようにしてほしい。また、どのように人間の行動を変えることができるのかという Step もしっかりと示すことが大切だと思う。オーストラリアで、「警察が街に出て行って車のスピードをチェックするのは、お金が欲しいからだ」という記事を書いた人がいる。その人は、「違反の切符を切ることで罰金を取り、財政を豊かにしたいから、警察は車のスピードをチェックする」と揶揄した。そうではないということを示すことが重要。

(近藤委員回答)

そのような批判を受けるので、そうならないように説明をして、理解を求めていきたいと思う。

(ハンソン先生返答)

日本でも、警察がスピードのチェックをしているのがお金のためだと言う人に「お金のためではなく命のためだ」と説得するためには、データを示すことが役に立つと思う。データを示すことは、セーフコミュニティだけではなく、他の機会にも活用してもらえるとと思う。それに加えて重要なポイントは、そうすることで命を救ってきたという事実をアピールすること。そういった重みはなかなか伝わりにくいと思うが、少なくとも関わっている皆さまは具体的に思い当たる経験があると思う。そのようなストーリー性を加えて話をしてもらえると、より聞いている側に引き寄せた説明になるかと思う。例えば、警察としてこういう事例があったなどの話を加えられると、より分かりやすい説明になる。数的な側面と併せて質的な側面も盛り込んでいくと、より興味を持って話を聞いていただいたり、共感を呼んだりできると思う。

事故によるダメージや成果については、いろいろな測定の仕方がある。救急救命医をやっている私たち審査員2人は、日々たくさんの子どもの事故などで運ばれてきたとき、治療や手当てなど、技術的な提供をすることはできる。だが、感情的な部分は私たちであっても手が届かない部分である。例えば、子どもが救急で運ばれてきて、一生懸命手を尽くしたけれど、命を救えなかった時、私たちが親に「手は尽くしましたが亡くなりました」「このまま意識が戻りません」「このまま健康な姿に戻りません」と伝えた時のパーソナルコストは、こういう数値には見えない大きなダメージになる。そういうことを考えているということは共感を呼びやすいのではないかな。

数値や統計には見えない側面を見せる際の事例として、私が参加したことのあるプレゼンテーションの話をしたい。突然パワーポイントを止めて部屋を真っ暗にして、部屋の真ん中に赤いライトを付けてフラッシュさせながら「ここは夜の救急救命です、子どもが1人、重症で運ばれてきました」という形でケース事例を紹介する。そうすることで質的な部分を演出しているプレゼンを体験したことがある。無機質になりがちな情報だけでは説明しきれないものについて、いかに質的なもので表現するかということになる。そのように、突然部屋を真っ暗にしてライトを付けて、警察が前に出てきて語り始めるというのも面白い。数字だと現実味が無か

ったり飽きてしまったりするところを、いかに質的なもので関心を持ってもらうか、理解してもらうかという工夫として、そういう演出をするのも1つの手である。本番に向けて、そういう工夫をしてはどうか。

(白石先生補足)

日本の他の自治体では、報告の後に関係する方たちが体験談や感想を話すところが増えている。皆さんがどうやったら伝えやすいか考えて工夫してみてくださいと思う。

## 11 講評

### ○チョ先生

今回このような場に関わらせてもらったことを嬉しく思う。また、前回の審査の時と比較し、皆さんがどれだけの歩みを進めてきたかということを見て2日間で見られて嬉しく思う。加えて、今回韓国から多くの仲間が栄区の事前指導を視察させてもらったことについて、韓国のセーフコミュニティチームの代表としてお礼を申し上げたい。

この2日間、栄区の一連の取組を見て、最初の認証の時から数年をかけてどれだけ取組を進めてきたかということを変更して確認でき、うれしく思っている。いろいろなデータを使って、何が問題なのか、栄区で何を解決しなければならないのかをしっかりと認識した上で、それに対する対策を講じているところは心強く感じる。今回は再認証の現地審査ではなく、1年前の事前指導であり、正しい方向に向かって進んでいるか、不足しているところはないか確認するための機会である。それを考えると、今回ご報告いただいたことを見て、あと1年あれば、皆さんは必ず再認証に向かって十分な歩みを進められるだろうと確信している。ハンソン先生から、具体的な内容についてお話させていただきたい。

### ○ハンソン先生

私もチョ先生の意見に賛成である。皆さまからこの2日間で見せていただいた数々の取組について、非常に素晴らしいポイントがたくさんあった。皆さまにはぜひそれを実感していただき、誇りに思っこの取組を進めてほしい。往々にして私たちは、一生懸命考えて取組を行うがゆえに近視眼的になったり、時には道を見失ったりすることもある。そんな時に、私やチョ先生のように外部の者から「ここはうまくいっている」「ここはいいところ、伸ばしたほうがいいところだ」「こういう風にすればもっと効果的になる」ということを言ってもらえるのは非常に良い機会だと思う。

この2日間何度もストーリーの話をしてきたが、皆さま方の一連の報告を通して、素晴らしいストーリーを確認することができた。ストーリーとは何かというと、どこの分科会もまず自分たちが抱えている問題点、改善点を示していた。何をしなければいけないかという前に、何が問題かを認識することが大切だと言ったが、それをしっかり示していると感じた。それも、自分たちがただ直感的に感じたことではなく、サーベイランス分科会で示したデータ等を使いながら、「こういう事実があるからこれを解決しなければならない」といった形で示し、それに対して、「この問題を解決するためにこれをやっている」ということを示しており、その論理的な流れ、ロジックがしっかり示されていたと思う。「2014年に振り返ったらこういった新しい課題が出てきた」、「こういうゴールを新しく定めた」、ということに対して、「なぜならばこういう問題があったからだ」という流れがあった。その後、2015年にもう一度評価をし直して新しいゴールを設定しなおしたり、新しい取組を開始したりしている。それがなぜ大切かということ、きちんと振り返りをしているからである。最初に設定したゴールをそのままにしているのではなく、常に振り返りを行い、その時々で何を改善しないといけないかを認識しながら、実情に合わせて取組を統合したり、増やしたり、変更したりという経緯を見せてもらったのが非常に良かった。取組を行っている中で、データの分析からどのように軌道修正して現在に至ったか、そして現在抱えている問題は何で、今後に向かってはどうしていくか、という風に、過去、現在、未来をつなげた形で説明されていた。一貫してどの分科会もそういった素晴らしいストーリーを示していただいたので、そこはぜひこのまま続けてほしいと思う。本番の審査の時も、そこをしっかりと示すようにしてもらえれば良いと思う。

皆さま本当に素晴らしい取組をしているので、それを誇りに思っほしいと思う。ただ、取組には終わりがあるわけではないので、今よりもさらに良くなる可能性も秘めている。私は、横浜市栄区には、テストで言うと90~95点を取ってほしいという大きな期待を持っている。地域の方々の人生、コミュニティでの生活を考えた時に、改善してここで終わりというものはない。地域の方々が今日より明日をより安全に、幸せに暮らしていくために、私たちは止まることなく、何かしらの努力を続けていくべきだと思う。私たちが改善に向けて

のポイントをお伝えすることで、取組が十分ではないからそのようなことを言っていると感じる方もいるかもしれないが、決してそういう意味には取らないでほしい。チョ先生もおっしゃったように、皆さま本当に素晴らしい取組をされている。そして、先ほど申し上げたとおり、しっかりと論理的に取組の経緯も説明しており、審査に引けをとらない取組をされていることを確認したい。今よりもっといい取組をしていただき、1年後に審査員を感心させてほしいという思いから、私たちのほうでいくつかコメントをさせてもらい、さらなる発展につなげてほしいと思う。

本番に向けてどのような準備をしていただくか、2段階に分けてお話したいと思う。1つは、審査に向けての準備として、審査員がよりの確に皆さま方の今までの歩みを理解するために、ストーリーの部分に工夫をしていただき、今よりさらにわかってもらえるよう、力を注いでもらいたい。今ここにいらっしゃる横浜市栄区の皆さまは、おそらく「今まで頑張ってきたのにまだ頑張るのか、そんな余力は残っていない」と思っているかも知れない。実際、私も皆さまの側の立場だったこともあり、その時は同じように思っていたので、皆さまがどのように感じるのかは自分の経験からもわかる。今回の取組をすべて見せていただき、共通して感じたのは、再認証に向けての基礎固めはできているということ。色々な取組がぶれておらず、基礎がしっかりできているので、この方向で進めてもらえれば良いと思う。本番に向けて60%程度はできていると思うので、残りの数十%はチューニングである。1年かけてチューニングをしてもらえれば良いと思う。それが事前指導の良いところ。今回のような機会がなければ、ゼロから再認証に向けて準備しなければならない。パワーポイントだけではなく、コンテンツについても言えることだが、今年の時点ではほぼ完成していて、来年に向けてはチューニングだけすれば良いということになれば、今回のプレゼンに少し手を加えてもらい、来年に備えていただくことになるかと思う。皆さまの今までの取組は年々積みあがっているもので、来年に向けて正しくチューニングをしてもらえれば、すぐそこにゴールが見えているのではないか。そのために、今回差し上げた指摘を反映させて、より取組を効果的なものにするかと思うので、それに資するコメントをしたいと思う。

まず、ストーリーについて、先ほど皆さま方はしっかりストーリーを示しているとお伝えしたが、いろいろな工夫の仕方があると思う。今回試したことをもとに、どうすればもっと分かりやすくなるか工夫する余裕が得られたのではないか。例えば、今日午後の最初の時間に私が申し上げたように、お昼の直後にずっと座っているとだんだん視点が遠くなってしまっている人がいるとわかったので、来年の午後一番の報告は外に出て実際に歩き、現地視察をしながら説明を聞くなど、眠くさせない工夫をすることができる。そういった工夫は、今年やったからこそできる工夫だと思う。来年突然審査をやってしまうと、それどころではなくてコンテンツの内容だけで必死になってしまうと思う。そういう意味では今回、皆さまは非常に良いチャンスを得られたのではないか。今回、交通安全対策分科会で実際に環境の改善をしたというモデルの事例を紹介してもらったが、私たちは事前指導の前に現場を見せてもらった。その現場の見学をプレゼンと併せて行えば、私たちは動き回って眠くなることはないと思う。それ以外にも、何らかの形で私たちを動き回らせて、眠気を誘わないようにするなど、同じことを示す上でも方法や手段を変える工夫をする余裕が、今回生まれたのではないか。ぜひこれを良いチャンスとして、来年に向かって準備を進めてもらえればと思う。

栄区は統計データ等を上手にを使って、論理的な説明をしていたので、そういった情報は私たちが理解をする上での助けになった。統計データ等のデータは、脳の左側で論理的に処理をしている。その時、右の脳が空いているので、本番に向けて、右の脳も使うよう審査員にアプローチしてはどうか。右の脳を使うためにどうすれば良いかと言うと、感情や心にアプローチすることが必要。先ほども申し上げたとおり、何を伝えたいかということによって、うまくそこを使い分けてもらう工夫をこれからしてもらえると良い。伝えたいメッセージによっては、統計の方が伝わりやすいかもしれないが、補足的に人々やコミュニティに関するストーリーの事例を提供することで、両方の脳を使って皆さんの取組を理解することができ、より効果的に伝わると思う。

私たち審査員がチェックしなければならない7つの指標は1つのスタンダードなので、どういう風に7つの指標を満たしているか、活用しているかが大きなポイントになる。審査本番で取組を報告する際や、申請書を

書く際には、そのポイントをアピールしてほしいと思う。特に、指標4は非常に大切なポイントになっており、報告を聞いていると皆さんきちんと使っていると思うが、それをもう少しアピールしても良いと思う。例えば、KYTについては、KYTはこんなものでこんな効果があるというスライドを1枚入れるだけで、審査員は確認をしやすくなる。これは1つの事例だが、そのような形でアピールし、メッセージを送ってもらうことも1つの工夫として検討してもらえればと思う。皆さまの中には、7つの指標と言われても何を指すのか分からない方もいらっしゃるかと思うし、これを言えばこの指標について十分言えているという説明も難しく、テクニカルな問題でもあるので、それを皆さまが独自に表現するというよりも、支援センターの白石さん、今井さんが皆さんを支援しているので、「こんな見せ方どうか」「どういう風に見せたらいいか」等相談してもらい、一緒に考えてもらいたいと思う。そうすれば、「栄区のこういう事例について、こういう説明をすれば指標のここできているとクリアに示せる」というアドバイスもたくさんもらえると思う。その部分について、本番に向けてブラッシュアップしてもらえることを期待している。

私がもう1つお伝えしたいポイントとしては、コミュニティの地域力、関与、参画、主体性、コミュニティが自分の問題として取り組んでいるかということ。私は、栄区のまちづくりの中の関心事としてこれらが非常に大きなウェイトを占めていると今回受け取った。実際、それは簡単には実現できない問題だというのは世界中共通している。世界のどこを見ても、それがあつという間にうまくいったという事例はなく、世界共通でチャレンジしている問題だと思う。そして、そのチャレンジをするにあたって一番大切なポイントは出だしであり、その出だしは何かというと、「正しい問題を把握しているか」ということである。今回、皆さまのどのプレゼンテーションを見ても、しっかりと「これはこういう理由で問題だ」ということを明確に述べていた。スタートのポイントがずれていると地域の方も疑問に思うが、そこをきちんと認識できているので、そこは心強く思っており、将来への期待をしている。なぜこのようなことを言っているかということ、私がもし「一言でセーフコミュニティを説明しろ」と言われたら「コミュニティの地域力を十分に上げて、自分自身で問題解決ができるくらい地域の力を高めるチャレンジ」だと答えたいと思っているからだ。なぜなら、地域の方々は地域で生活をしており、その中で自分たちの問題点を認識している。そういう意味で、地域の方は地域の専門家、プロフェッショナルである。その方たちが、何が効果的で何が一番必要かを認識している方々である。ただ、地域のエキスパートは地域の方だが、そこに2つの問題がある。そのうちの1つが、人間は怠け者だということである。できることなら自分は苦勞せず、他の人に問題を解決してほしいと思いがちである。そしてもう1つは、私たちはチャレンジすることを恐れる傾向があるということである。「やってみて失敗したらどうしよう」「恥ずかしい」などと思ってしまう。そういう2つの弱い側面を持っているので、どうしても「問題があるから」「地域の専門家だから」と言って取組にチャレンジするところまでいかないところがあると思う。昨日の初めに、「小さい子どもは何を質問するか」という質問をした。小さい子どもというのはすべてのことに関心を持っていて、世の中や大人の世界を理解したいという思いから、何に対しても「なぜ？」と質問する。そして、私がもう1つ、子どもが素晴らしいと思う点は、決して諦めないところだと思う。小さい子どもは歩いていてもすぐ転ぶが、すぐ立ち上がってまた歩こうとする。決して諦めることなく、転んでも転んでも立ち上がってまた歩こうとする。そのあきらめない気持ちは非常に素晴らしいと思う。子どもは皆大人になるが、大人になると残念なことに、恐れることを身につけてしまう。失敗することは恐れるが、チャレンジしなかったことを恐れることはなくなってしまう。そこが大人の悲しいところである。世界的に見ても共通だが、どうしても「行政にやってもらおう」となってしまうのは、そこにも関係があるのかもしれない。一方で、セーフコミュニティはそういうものではないので、楽ではないと思う。皆さん、セーフコミュニティは大変だと思わないか？セーフコミュニティは難しい取組で、私たちはしょっちゅう転倒する。ひじにあざを作ったりしながら進んでいる状況なのではないかと思う。だが、先ほどお伝えしたとおり、転んでも転んでも立ち上がっていただき歩くことで、歩くことを覚えていって、その次に走ることを覚えていって、というように、セーフコミュニティの取組もどんどん進化していくのだと思う。ここにいる行政の方、あるいは地域の代表の

方は時に、「なぜ自分たちは地域のために一生懸命やっているのに、地域の方々は動いてくれないのだろう」と思うかもしれない。だが、セーフコミュニティの取組をしている時には、自分はやっと歩き始めた子どもを導いている親なのかもしれないと考え、転んでも励まし、根気強く地域の方々と付き合っていけば、次第に足取りもしっかりして、私たちと一緒に歩いてもらえるようになるのではないかと。一緒に取り組んでいる仲間がたくさんいるので、そういった仲間の取組を参考にしながら、この道が間違っていないことを信じて進んでもらえればと思う。日本の社会の仕組み的に、私の住んでいるオーストラリアでチャレンジするより難しいのかもしれない。なぜなら、日本は「Safe」という言葉がカバーするエリアや責任が、オーストラリアより大きいように見えるからだ。地域が解決するエリアと行政が解決するエリアを比較した時、日本では行政の方が多いということになると、地域ができることは少なくなる可能性もあると思う。だが、前回、長野県箕輪町の審査を担当した時に、素晴らしい地域の取組を紹介してもらい、日本の環境の中でできる素晴らしい取組があるという事例を見せてもらった。その事例を簡単にここで紹介したい。

長野県で2月に行われた審査だったので、雪が降っている時だった。箕輪町では、自治会単位でモデル自治会を設定し、それぞれのモデル自治会でミニサイズのセーフコミュニティ推進協議会や対策委員会を作り、自分たちでデータを分析し、この地域で取り組まなければならないことは何か、問題は何かという重点課題を設定し、そのために何をしたら良いか考えているのだが、熱意とそれによって得られた成果を非常に熱く語ってもらった。そこでは、地域の方々が自分のこととして取り組み、自分たちが解決者だという意識で地域の問題に取り組んでおり、その姿に非常に心を打たれた。私はその自治会の取組を聞いて、非常に素晴らしいと思ったが、ここで簡単に説明しても皆さまにはピンとこないかもしれないので、もし関心があるようだったらぜひ白石さんに聞いてもらえれば、彼女が色々支援していたし、日本語で書かれた申請書なども持っているのだから、それを読んでもらうこともできる。情報収集だけではなく、実際に行ってお話を聞いてみるのも良いかもしれない。日本は日本の仕組みのなかでそういうことができるということを実感した1つの事例なので、栄区は栄区の実情の中でできることがたくさんあると思う。日本だから無理だ、大変だと思わずに、その中で何ができるかと考えてもらえればと思う。

### ○チヨ先生

私からは、本番に向けてどのような準備をしたら良いかという視点から、2つのコメントをしたいと思う。まず1つが、ドメスティックバイオレンスについてである。今回、様々なデータを見せてもらったが、今のところドメスティックバイオレンスに関するデータはあまり表に出てきていなかったと思う。世界中でドメスティックバイオレンスは問題になっているので、問題がないというわけではなく、問題が表に出にくいということだと思う。他のデータのように、客観的なデータを入手しにくいとは思いますが、どういう状況か確認をして、それに対してどういう取組をしているということを本番で見せられると良いのではないかと。世界的に関心が高まっていることでもあるし、審査員はその部分を聞きたいと思うので、もう1度確認することをおすすめする。

そしてもう1つが、栄区の皆さんの中にご存じの方がいるか分からないが、国際セーフスクールの取組についてどのように使えるか考えてもらえればと思う。日本は、世界の中でもセーフスクールの活動が活発な国の1つである。

(白石先生補足)

チヨ先生はセーフスクールの認証を目指せと言っているわけではなく、そのやり方を1度確認して、それを栄区でできるか考えてもらえればと言っていると思う。

(チヨ先生続き)

セーフスクールをやっていると必ず子どものけがが減っているのだから、そのやり方を導入できるかどうか、参照できるかどうかを一度検討してはどうか。セーフスクールの主な特徴は、「子どもの安全は学校が守る」という一方的な話ではなく、インタラクティブな話だということ。子ども自身も子どもの安全を自分たちで作

出すことができる主体者として、学校を変えていく主体者として活動していく。よって、セーフスクールは学校や学校の先生がこれをしなければならないということではなく、大きな3つのアクターと一緒に協働で取り組むということが特徴。その1つは子どもたち自身。子どもたちもいろいろなことができるし、子どもの発想力は素晴らしいので、まずは子どもたちがここに入る。2つ目は先生、あるいは職員の方。そして3つ目は親。この3つの要素が一緒になって取り組む。それは決して学校にとどまらず、そのノウハウ、子どもが得た安全力というものは、子どもが家に帰ることで家の安全にもつながるし、地域の安全にもつながる。一度、セーフスクールの可能性について検討する、あるいはどのようにやり方を参考にできるか検討してもらえると良いのではないか。

## ○ハンソン先生

チョ先生と私の意見を総括させてもらおうと、皆さまは既に十分素晴らしい取組をしてきている。この調子で行けば、来年は確実に現地審査でもっともっと素晴らしい報告をしてもらえるのではないかと思う。今でも十分、これまでの取組に自信を持ってもらいたいところだが、来年はもっと自信を持ってもらえると思う。私からは、皆さまの取組に引き続きエールを送りたいと思っている。

少し視点を変えた進め方をしたいと思う。今回、栄区に視察に来た方は手を挙げてほしい。ここで、視察に来た方に聞きたいと思う。せっかく栄区に素晴らしい機会をもらったのだから、視察に来た方からもフィードバックをもらいたいと思う。その上では、2つのポイントがある。1つは、この2日で何を学んだか。もう1つは、どのような内容を自分のコミュニティに持ち帰って反映させたいと思うか。この2つのことについて、回答をお願いしたい。

(厚木市 倉持さん)

交通事故の話など、日頃当たり前に思っていることの根拠が分かっていたなかったので、根拠が何かということに戻ってから研究したいと思う。

(ハンソン先生)

ありがとうございます。今のようなコメントをぜひいただきたい。皆さま知っていることもたくさんあると思うが、そこから何を学ぶことができたのかということは私たちにとっても知りたいことである。

(韓国視察団の方①)

2日間で気になったのは、各分科会の委員の方々が高齢の方が多く、驚いた。韓国では、高齢の方がそれほど活発に活動に参加をされていないので、それは学ばなければいけないと思った。また、具体的に韓国に持ち込みたい事例としては、道路を改修して速度を下げたという点。韓国での自転車の事故によるダメージを軽減するのに役立つと思う。

(韓国視察団の方②)

スンチョン市からセーフコミュニティの勉強で来た。2日間で感銘を受けたのは、プレゼンテーションが全体的にとっても論理的に構成されている点である。統計や事例を使っていくつかのポイントを集中的に説明しているところは勉強になった。スンチョン市でも、今年の下半期に審査を予定している。その時はぜひ、韓国のスンチョン市に来てもらえればと思う。

(久留米市 末安さん)

久留米市は来月事前指導を控えており、この機会を自分たちの事前指導に生かそうと2日間真剣に視察をさせてもらった。大きく2つのポイントを見させてもらったが、1つは細かい事務的な部分。こういった準備が必要かというところを勉強させてもらった。もう1つは中身についてだが、ハンソン先生が何度も言っていた「なぜ？」という部分、指標4の根拠に基づいた取組というところについて、分かっているつもりだが改めて重要だと感じた。もう1つ印象に残ったのが、論理的な情報に加えて感覚的な情報も入れるという見せ方についても重要だと思った。また、最後にチョ先生が言っていたDVの問題について、栄区は分科会を持って取り

組んでいるわけではないので、それについての発表がなかったのだと思うが、世界的にも関心があるようなことについては、分科会で取り組んでいなくてもきちんとやっているということに触れたほうが良いと思った。

(白石先生補足)

指標3のハイリスク集団への取組の部分などで説明できると思う。対策委員会を立てろという話ではなく、そこにも目を配っている、何らかの形で取り組んでいるというメッセージを出しておく方が良いという話だと思う。

(チョ先生返答)

必ずしも分科会を立てなければいけないという話ではなく、もしそういう理由で分科会を作らなければならなくなれば、どんどん分科会が増えていくことになってしまう。ドメスティックバイオレンスは表に出てこない、隠れている問題の1つであり、最近ようやく数字が出てきたりして見えてきている。そういう隠れている問題があるということを伝えなかったということもあった。現在、日本では自治体によって得られる情報も様々なので、まずは情報を確認し、もし状況がある程度わかって、重点課題として分科会を設置してやらなければならないと思えばそれを設定し、取組していることをアピールしてもらえば良い。そうでない場合は、現在こういう状況にあり、それに対して既にいろいろ取組をやっている、ということや件数が少ない、ということを示してもらえばそれで十分だと思う。



## 栄区傷害サーベイランス分科会の今後の進め方について

栄区では、平成 25 年 10 月にWHO（世界保健機関）が推奨するセーフコミュニティの国際認証を取得し、区民、関係団体、行政等が一体となって事故やけがの予防活動に取り組んできました。

平成 30 年度に再認証を取得するにあたり、平成 29 年 9 月に実施した認証機関の審査員による事前指導を踏まえ、6 月に控える本審査で各分科会の日頃の取組を効果的に発表するため、今後、次のとおりサーベイランス分科会を進めます。なお、再認証後の進め方につきましては、別途、ご相談いたします。

### 1 サーベイランス分科会の役割について

セーフコミュニティの認証における 7 つの指標のうち、主に 3 つ（根拠に基づいた取組を実施する／外傷が発生する頻度とその原因を記録するプログラムを実施する／プログラムの内容・実施行程・影響をアセスメントするための評価基準を設定する）を満たすために、「データの収集・分析」「助言・アドバイス」の役割を担う組織です。

《参考：セーフコミュニティの認証における 7 つの指標》

- ①分野の垣根を超えた協働を基盤とした推進組織を設置する
- ②両性・全年齢、あらゆる環境・状況をカバーする長期プログラムを継続的に実施する
- ③ハイリスクの集団・環境および弱者を対象としたプログラムを実施する
- ④根拠に基づいた取組を実施する
- ⑤外傷が発生する頻度とその原因を記録するプログラムを実施する
- ⑥プログラムの内容・実施行程・影響をアセスメントするための評価基準を設定する
- ⑦国内外のセーフコミュニティネットワークへ継続的に参加する

《参考：サーベイランス分科会の役割と全体の流れ》



## 2 今後(再認証取得まで)のサーベイランス分科会の進め方

### (1) 分科会の進め方

#### これまで

サーベイランス分科会を開催し（出席者：サーベイランス分科会委員、8つの分野別分科会の座長及びそれぞれの事務局）、8つの分科会から活動実績や自己評価について報告。

⇒報告に対してサーベイランス分科会委員より助言・アドバイス

#### 今後（再認証までの間）

**各委員1～2分科会の担当制**とし、本審査のプレゼンテーション資料について個別にアドバイスを実施（平成30年3月までに）

⇒平成30年4月にサーベイランス分科会を開催し、資料の修正内容等について共有、最終確認

#### 《アドバイスの流れ》

- ①各分野別分科会から、担当のサーベイランス委員に対し資料の説明
- ②担当委員より、各分科会へアドバイス
- ③各分科会は、アドバイスを受けて資料を修正し、修正内容について担当委員に報告

※メールや電話による相談も可としますが、①については原則面会の上、各分科会等から説明をさせていただきます。

#### 《担当委員について》

次のとおりとします。

委員名	担当分科会案	委員名	担当分科会案
田高 悦子 (座長)	・こども安全対策 ・児童虐待予防対策	山崎 大輔★	高齢者安全対策分科会委員 自殺予防対策分科会委員
大原 一興	・交通安全対策	近藤 秀政★	交通安全対策分科会委員
小田原 俊成	・自殺予防対策	平間 健一★	交通安全対策分科会委員
豊田 宗裕	・高齢者安全対策	田中 豊★	自殺予防対策分科会委員 防犯対策分科会委員
垣内 康宏	・防犯対策	★印の委員の皆様は、引き続き所属の分科会にて活動へのアドバイスやご協力をお願いします。	
木村 博和	・スポーツ安全対策 ・災害安全対策		

## (2) アドバイスの視点について

平成 29 年 9 月に実施した認証機関の審査員による事前指導の講評内容に基づき、主に次の 2 つの視点に重きをおきながら資料をご確認いただき、各分科会へアドバイスをお願いします。

### 視点① 根拠に基づいた取組になっているか

(審査員コメント) 申請書の作成やパワーポイントの修正の際には、大学の先生の調査の結果や他の自治体でけがが減っているという成果を補足情報として付けておいたほうが確実にプラスになるので、ぜひ付けてほしい。今回は出典を小さく書いているが、もっとしっかり示したほうが良い。申請書を記載する際にも、これは自分たちが勝手に良いと思い込んでやっているわけではなく、きちんと科学的根拠を確認した上で導入しているということをアピールすることは、指標 4「根拠に基づいた取組」であることを示す重要なポイントである。教授の顔写真でも入れたらもっと良いのではないかな。

### 視点② 全体を通して論理的な資料となっているか。

(審査員コメント) 大切なのは、「何をしてきたか」ではなく、「なぜ」「どういう風に」取組を進めているのかを見せてもらうことである。現地審査の際は、「Who(誰が)」「Whom(誰に)」「When(いつ)」「Where(どこで)」「What(何を)」「How(どういう風に)」の 5W1H、6 つのポイントを押さえているかどうかを頭に入れて、説明してほしい。



## 再認証までのスケジュールについて

日程	全体
1月15日(月)	サーベイランス分科会 ①事前指導の報告について ②サーベイランス分科会の今後の進め方について ③再認証までのスケジュール
1月17日(水)	担当者会議(8つの分科会の事務局を対象に実施) ⇒プレゼン資料修正依頼
2月20日(火)	初回提出期限
3月23日(金)	最終提出期限
	↑ アドバイスを実施 ↓
4月上旬	サーベイランス分科会 ①プレゼンテーション資料最終確認 ②傷害サーベイランス分科会の発表について ⇒翻訳委託実施
6月15日(金) ～17日(日)	本審査候補日① ※サーベイランス分科会の発表：6月15日(金)
6月22日(金) ～24日(日)	本審査候補日② ※サーベイランス分科会の発表：6月22日(金)
10月6日(土)	再認証式典・祝賀会